

# 「コミュニケーションの現在とこれから」

東京経済大学コミュニケーション学部 20 周年記念シンポジウム記録

2015 年 12 月 12 日 14 時から 大倉喜八郎進一層館ホール

## プログラム

司会 松永智子（コミュニケーション学部専任講師）

前口上に代えて 川浦康至（コミュニケーション学部長）

シンポジウムの趣旨と登壇者の紹介 柴内康文（記念シンポジウム実行委員長，コミュニケーション学部教授）

## 第 1 部 講演

- 1 「コミュニケーションの現在とこれから」ドミニク・チェン（IT 起業家）
- 2 「ニュース，メディア，そしてコミュニケーションの未来」藤村厚夫（スマートニュース 執行役員）
- 3 「別の天と地 コミュニケーションの現在とこれから」荻野 NAO 之（写真家）

## 第 2 部 パネルディスカッション

ドミニク・チェン  
藤村厚夫  
荻野 NAO 之  
桜井哲夫（コミュニケーション学部教授）  
佐々木裕一（コミュニケーション学部准教授）  
深山直子（コミュニケーション学部准教授）

閉会挨拶 関沢英彦（コミュニケーション学部教授）

## 前口上に代えて

川浦康至

皆様、こんにちは。本日は、コミュニケーション学部  
の成人式にお越しいただき、まことにありがとうございます。「前口上に代えて」という  
題で、コミュニケーション学とコミュニケーション学部についてお話ししたいと思います。

### コミュニケーション学（部）？

オープンキャンパスで受験生と話していると、まずこういう質問が出てきます。

「コミュニケーション学って何？」「コミュニケーション学部ではどんなことを学ぶのですか」。

私の専門である心理学では、こういう質問はまずありません。コミュニケーション学の特徴かなと思います。

かたや今いる学生に聞くと、「何でも学べる」とか「好きなことが勉強できる」という答えが返ってきます。受験生はコミュニケーションを対象として考えている。インターネットについて学ぶ、スマホについて学ぶ、テレビについて学ぶというふうに。それに対して学生は、それに加え、方法論としても考えている。つまり、コミュニケーションという見方も学べる。それがコミュニケーション学、あるいはコミュニケーション学部という認識を持っているなと思うわけです。

### コミュニケーションをめぐる状況の変化

今から 20 年前、開設時の学部長をされた田村（紀雄）さんも指摘されていますが、コミュ

ニケーション学はアメリカで生まれました。戦争が終わり、プロパガンダ、政治宣伝、思想宣伝について、どうすればそれに対抗できるか、反対に、どうすれば効果的なのかという、されるほうとするほうの両方から研究が始まりました。この流れは今でも脈々と続いています。

学部発足時の 95 年は、情報の真贋を見極めることが大事である。たくさん情報が出回る。その中で正しいもの、正しくないものはどういうふうなものなのか。それを見極める力、あるいはメディアリテラシーを育てることがプロフェッショナルにもアマチュアにも求められているという認識の時代でした。ちなみに、速水（健朗）さんが書かれた『1995 年』という本の帯にもありますように、実はこの年は大事な年だったと強調されています。

そして 20 年後、今年 2015 年です。コミュニケーションという観点からすると、関係分断、つまり、関係づくりを損なわせるような状況が増えてきているように思います。例えば個人情報保護法という法律は、個人に関することからは情報であるという認識を持たせてしまった。名簿がつくりにくい、声高に言われた「絆」もつくりにくい、そういう状況です。自己責任という言い方であるとか、貧困に端を発する格差も関係をつくりにくくしている。そういう 20 年間だったというふうに思います。

### コミュニケーションの再発見

そういう中でコミュニケーションがいかに大事であるか。あるいはコミュニケーション学というものに対する期待が高まってきたと思っています。

コミュニケーション学を学問として考えたと

き、マスコミュニケーション、つまりテレビや新聞に代表されるコミュニケーションそのものを研究する。これは伝統的な見方です。もう1つはコミュニケーションという見方で社会のさまざまな関係、人間関係や社会問題、国際問題を考えてみる、そういう「関係」という視点もコミュニケーション学です。

### 「コミュニケーション」視点の適用

コミュニケーションという視点を現実場面で考えると、このようなことがあります。例として高齢者の食事支援を紹介しましょう。私も還暦を過ぎ、関心のある問題です。

支援のありかたは2種類あるように思います。1つは、食べる「モノ」を提供すること。宅配サービスです。町を歩いていても食事の宅配車を見かける機会が増えました。

しかし、それでいいのかという気がします。日本老年学的評価研究によれば、孤食の高齢男性は2.7倍うつになりやすいという研究があります。栄養的に十分だったとしてもこういう状況がある。食べる「コト」、つまり一緒に食べる相手がいる、話しながら食べられる。そういう「場」をつくることも食事支援のありかたとして重要です。両者は、もちろん対立するものではありませんが、ビジネスにしやすい前者だけが進んでしまっていて、後者が置いてきぼりになっている状況があります。食の支援をコミュニケーションという発想で考えると、いろいろ役に立てるのではないかと考えています。

### コミュニケーション学の課題

そろそろコミュニケーション学がやるべき仕事について考えたいと思います。

1つはコミュニケーションのしかた、具体的にはコミュニケーションスキルとか伝える術に関する研究、あるいはトレーニングに関するものです。もう1つは関係のつくり方、あるいは伝える・伝わる仕掛けを考える。それはデザインと言ってもいいのかもしれませんが。

### コミュニケーションのしかた

コミュニケーションのしかたについて、いくつか例をご紹介します。1つはコミュニケーション障害。「コミュ障」と略されることもあります。もう1つは『伝え方が9割』というベストセラーになった本のご紹介です。

よっぴーというニックネームで知られる、たまたまきょうが誕生日の吉田（尚記）さんが、『なぜ、この人と話をすると楽になるのか』という本を書きました。ベストセラーにもなっています。彼はニッポン放送のアナウンサーです。しかし実は、彼はコミュニケーションに困難を抱えていました。本人曰く、些細な会話すらままならないコミュ障だった彼が20年かけて編み出した実践会話技術を披露したのがこの本なのです。

著書インタビューで、吉田さんはこう言っています。

「コミュ障」という言い方がある。しかし、水泳ができないからといって人は「水泳障害」とは言わない。コミュニケーションも練習をしないとできるようにならないのに、なぜか当たり前にできるもののように思われている、コミュニケーション能力、コミュニケーションスキルの上達には練習が必要なんだということを言いたかった。

『伝え方が9割』は、コピーライターの佐々

木圭一さんが書いた本です。タイトル自体も伝え方を意識しているわけですがそれでも、この本もよく売れました。続編が出ているほどです。彼は、小さい頃、父親の転勤で引っ越しを何度も繰り返し、引っ越し先でなじめなかった、もっぱらファミコンが友達だったと彼は言っています。

コミュニケーションは、その内容もさることながら、ひとえに伝え方、コミュニケーションのしかたにかかっているように思います。

#### コミュニケーションのつくりかた、関係のつくりかた

もう1つは、コミュニケーションのつくり方。その具体例をいくつか紹介します。

京都の安井金比羅宮は、縁切り縁結びとして有名な神社です。境内に「縁切り縁結び碑（いし）」があり、そこにある穴を「形代」（お札）を持ち、願いごとを念じながらくぐるというものです。表からくぐると悪縁が切れ、裏からくぐると良縁が結べ、最後に「形代」を貼る。そういうものです。これが人気なのは、そのご利益のせいなのでしょうが、コミュニケーション学の視点からすると、こんなにたくさんもの人が縁を切りたがっている、結びたがっていることが目に見えることにあるように思います。碑がコミュニティを表現している。何層にもなった形代を見ると、自分のような人が大勢いることを実感できます。そういうふうに見ることもできるのではないのでしょうか。こういう場合は、みなさんの近くにあるはずです。

つぎに、電車の発車案内をご紹介します。ある日、吉祥寺駅ホームの案内板に「武蔵小金井行 10 時 04 分」とありました。けれども、10

時 13 分現在、まだ来ていません。その表示の下に「遅れています」との表示が流れていましたが、いったいいつ来るかわからない。

一方、台北の地下鉄の発車案内は、あと何分で来る、と表示されます。絶対表示ではなくて相対表示なのです。「2 分後」や「3 分後」といった表示であれば、時計を見なくても、どのくらい待てばいいのかわかる。しかも、時間どおりに運行されていなくても対応できます。こうした表示の仕方を考えることも重要な研究テーマではないでしょうか。もっとも、この対比はシステム側を優先するか、利用者側を優先するかという違いでもあります。

発車案内については、実は、もっと危機的な状況もあります。大宮駅の新幹線ホームにあるポスターが貼ってあります。発車案内の見方を説明したものです。これは発車時刻であるとか、1つ1つ、いわば文法を説明しないと伝わらない。時刻表を見る機会が減っていることも関係しているのかもしれませんが、どうすれば伝わるのかは重要な課題になっているように思います。

ある高校に出張授業で行ったときのことで。その高校では2年生になると、研修旅行でドイツに行きます。その旅行に先立ってドイツに対するイメージをみんなで洗い出し、帰ってきてから、ふたたび同じようにドイツについてのイメージを書き出すことをやっているようです。その二時点の生徒たちの声がポストイットののような紙切れで貼り出されていたのです。両者を比較すると、研修前では紙の枚数そのものが少ない。文章自体も短い。ところが、研修後は枚数も多いし、文章も長い。例えばこんなことが書いてあります。

「お風呂は2日に1回しか入らないが、なぜか汚くない」とか、「香水をたくさんつけるからいい匂い」「水筒が大きい」……。

2日に1回しか入らない私もびっくりしたのですが、こういうことは現地に行かないとわからない。現地に行くことに意義かと思いますが、情報はたくさんあっても、日常的なことはなかなかわからない。こうした例も、伝わる・伝わらないを考えるヒントになるかなと思います。

「コミュニケーション」を限定することから「コミュニケーション」の意味を限定してみようというのが最後の話です。

「コミュニケーション」はとても便利な言葉で、何でもコミュニケーションと言ってしまう面があります。ですから、コミュニケーション学は汎コミュニケーション論に陥りやすい。しかし、それを防がないと研究はできないし、勉強もできない。防止策として「コミュニケーション」の意味を限定してみることが欠かせないように思います。

「表現」、あるいは「伝達」「交流」「対話」、プロパガンダの原点かもしれませんが「説得」とか、そういう言葉でコミュニケーションをクリアにして迫ることも大事なかなと思っています。

#### コミュニケーション学にできること

さてコミュニケーション学に何ができるのだろうか。むずかしいのですが、考えました。すると、3つほど浮かびました。

1つは、人も社会も関係の中にしか存在し得ない、そのことに気づききっかけをコミュニケーション学はもたらしてくれる。2つ目は、メディアの重要性。もともと英語には、媒体の

ほかに、メディアには、中間とか半（なかば）、あいだ、といった意味もあります。そうした存在の大事さを発見することです。3つ目は、われわれが接する情報は限定されているということです。その限られた情報で現実がわかった気になっているという現実です。

関係の重要性、メディアの重要性、情報の限定性に気づけることがコミュニケーション学にできることだと思います。

その先に何があるかという、寛容な社会、共存できる社会の構築かなと思います。そうありたいと考えています。

#### シンポジウムの趣旨と登壇者の紹介

柴内康文

本日はたくさんの皆さんにお越しいただきまして、ありがとうございます。企画に携わった一員という立場から登壇者をご紹介します、そして趣旨をご説明させていただければと思います。

お一人目が、情報学研究者でIT起業家のドミニク・チュンさんです。「NHK NEWS WEB」の木曜日のネットナビゲーターとしてもご活躍です。藤村厚夫さんはスマートニュースの執行役員、シニアバイスプレジデントをお務めでいらっしゃいます。そして写真家の荻野NAO之さん。モンゴロイド文化圏の暮らし、また京都の花街の舞妓さんの成長などを追った作品でも知られています。

どの方も、伝えること、伝え合うことにまきに取り組んでいらっしゃる方々です。何らかの形でどの方も本学部教員とのご縁がありまして、今回お招きすることができました。

## 「コミュニケーションの現在とこれから」

コミュニケーション学部は現在、メディア、企業、グローバルの3コース制を取っています。3コース制で3人お呼びいたしましたから、どなたがどれにとお感じになるかもしれません。けれども、実際はどの方もメディアにかかわっておられますし、またコミュニケーションとビジネスの問題を考慮しておられたり、あるいはグローバル性といったものの接点があるように思っています。コミュニケーションの最前線でお仕事をされている方々に、現在のコミュニケーションの有りようですとか、あるいは今後のコミュニケーションのあり方についてご考察を披露していただければというふうに考えています。

私たちは、20年経っていわば成人したコミュニケーション学部の今後を見通していききたいとの思いがあります。お三方のお話にもし共通するような部分があるとすれば、それは学部全体としてこれから考えていかなければならないテーマということになりましょうし、また異なった側面があるということであれば、それは各科目やコースで別個に取り組んでいかなければならない課題ということになろうかと思えます。

20周年を迎えたいま、これからの20年を私たちは考えるわけですが、それは別にしましても、コミュニケーションは、私たちすべてが行ない、また付き合ったり悩んだりしていく、そういう問題だと思えます。当代切っ手の論客といえる方々の問題提起から、コミュニケーションの現在、そしてこれからをご来場の皆さんが考えるきっかけにいただければと思っております。

それではどうぞよろしくお願いいたします。

## 講演1 コミュニケーションの現在とこれから

ドミニク・チェン

20周年、おめでとうございます。

20年前といたら95年なので、当時の私はファミコンとかプレイステーションで遊び続けていた時期かなと懐かしく思っています。

「コミュニケーションの現在とこれから」という非常に大きなお題をいただきました。私はもともとデザイン学部出身ですが、コミュニケーションは大学の専攻でも非常に大きな比重を占める概念でした。さらに今の仕事がITを使ったコミュニケーション・ツールをつくることなので、その両方にかかるお話をさせていただきます。

こういう場所でドミニク・チェンと名乗ると「芸名なんですか」とよく聞かれます。こんな顔で日本語も話すので不思議に思われる方もいらっしゃると思います。実は、私はフランス国籍で、東京で生まれ育ったのですが、フランスの学校へずっと行っていまして、今もフランス市民です。

2015.11.13

最近、コミュニケーションについて個人的にも一番深く心に刺さっている問題があります。ちょうど1ヵ月前にパリでテロが起こり、130名以上の方が犠牲になりました。

私も中高と5年以上パリに住んでいました。今回は7ヵ所ほどで同時多発的テロが起こったわけですが、そのうちの1ヵ所が、私の叔父や親戚が住む通りでした。事件が起きたと



き、すぐに連絡して安否を確認しました。もしかしたら殺されてしまったかもしれないという不安に襲われましたが、幸い家族は皆無事でした。

この間、パリに関する報道、アメリカや現地のニュース、世界中の報道を見ていました。非常に重苦しいイメージがメディアを駆けめぐりました。パリでは非常事態宣言も出され、街中に警官や機動隊が配置され、このまま戦争に突入するのではないかと、非常に心が重くなる姿が映し出されました。

フランスのオランド大統領もすぐさまシリアに空爆を宣言して、まるで14年前の9.11のときのアメリカ政府と同じ轍を踏んでいるなという既視感がありました。フェイスブックやツイッターでは、フランス人の知人や有識者が、そうなのはいけない、われわれは反イスラム政策を取っていいのか、アメリカの犯した過ちを繰り返してはいけない、といったメッセージが書かれていましたが、それらもメディアが映し出す好戦的な政策やイメージで上書きされていた。そういう無力感をずっと感じているわけです。

フランスは自由、博愛、平等を掲げていたにもかかわらず、どうしてこういうことが起こったのか。その深い原因を探り、向き合うことからしかこの問題には対応できないのではないかなと思っていたところに、今回のテロで妻を殺害された遺族の方が自身のフェイスブックで、「テロリストに向けた手紙」というのを書いているのを見ました。これが、私が感じていたフランス的な考え方を表しているなと感動しました。これを、すぐさま周囲にも伝えたいと思って日本語に訳しました。

その趣旨をお伝えすると、「私」（手紙の筆者）は自分の妻をあなたたちテロリストに殺害されたけれども、私はあなたたちに憎しみという贈り物を与えない。そういう表現をした。つまり、テロリズムに対して憎しみというもので返したら、自分もその同じ論理に陥ってしまう。私はそういうことはしないし、まだ1歳の息子にもその憎しみを継承させないという、力強いメッセージでした。

これがフランスのフェイスブック上で20万回以上シェアされ、現地の報道やBBCが取材したりと、大きな反響を得ました。これを私が日本語に訳して、「Medium」というブログに載せたところ、そこだけでも3,000回以上リツイートされ、多くの人が読んでくれ、その後大手新聞なども報じました。

どうしてこの手紙を翻訳したいという衝動にかられたかということ、フランスはこのテロをきっかけに国内世論が分断されているからです。先週日曜日に地方選挙があり、国民戦線という極右政党が27.7%を勝ち取り、第一党に躍り出ました。ついで、保守が27.2%、現政権の社会党政権が23.4%。

なぜ極右にフランス世論が流れたのか。今回のテロが大きく影響しているのですけれども、さきほどプロパガンダという話がありましたが、国民戦線は今回の事件を利用して、人びとの恐怖心を煽って若者たちの気持ちを掴んだ。27.7%という数字の裏には18歳から25歳の、いま大学で学んでいる年代の人たちが33%も占めている。そういう若者たちに、街頭インタビューで聞いてみると、現政権や政治家、いわゆるインテリはしゃべっているばかりで、失業問題とか社会問題を解決してくれない。仕方なく

新しい可能性に賭けている。差別主義的ではない人までも極右政党に望みを託すような事態が起こっています。

どうしてこのような話をしたのかというと、この私たちの社会にかかっている問題の根本には多種多様なディスコミュニケーションが複雑にからみあっていることを表していると思うからです。

### 基礎情報学

私は西垣先生が恩師でして、東京大学の博士課程で副指導教官を務めていただきました。2年前に博士号を取得したときの論文は『インターネットを生命化するプロクロニズムの思想と実践』というタイトルの書籍として上梓しました。

西垣先生が立ち上げられた「基礎情報学」は、コミュニケーションを社会システムとして捉える学問です。コミュニケーションが、個人間のコミュニケーションであったり、もしくは個人と社会のコミュニケーションであったり、社会同士のコミュニケーションであったり、さらには現代の情報技術社会と照らし合わせると、機械と人間がいかにコミュニケーションするか、機械を介して人間同士がどうコミュニケーションするか、そういうことを研究する学問です。

基礎情報学は大きな流れでいうと、サイバネティクスという1940年代に生まれた考え方にくみします。これは人間と機械のコミュニケーションをどう制御して、それをどう把握するかを扱う学問です。その中でどういうことがメディアとかコミュニケーションとして考えられているかをお話したいと思います。

メディアという言葉には一般に、新聞や雑誌、

ニュースメディア、いわゆるマスメディアだったり、情報媒体というイメージがあったりすると思います。けれども本質的には、芸術や表現の世界では何かを表現する際の素材であったり、道具もミディアム（メディアの単数形）と呼ばれたりします。この両者に共通するものとして、情報を媒介するもの全般をミディアムと言えるのではないかと思います。

### 情報は媒介されるが伝達はされない

情報を媒介するとはどういうことか。情報は媒介されても、伝達は起こらない。キャッチボールのように、私が情報を投げて、皆さんの頭の中に情報がインストールされたり、テレビを見たからといってそのまま情報がすっと落ちたりということはない。情報は受け取る人間によって作りかえられるからです。となると、メディアは情報が受け取られて作りかえられる仕組み全体を指していると言えます。

構成主義という考え方によれば、客観世界というものは存在しなくて、世界はあくまで個々の個体の感覚運動から主観的に立ち上がるものでしかない。そして疑似的に情報は伝達されるけれども、厳密には私の情報への感じ方と皆さん個人個人の情報の捉え方とは異なっています。つまり、主観世界が乱立していると見ることができるのですが、幸いにも主観世界は交流し合って影響し合う。それこそがコミュニケーションなのではないでしょうか。

社会的コミュニケーションに視座を移すと、「現実像」という言葉が重要になってきます。現実像とは、平たく言えば、われわれ全員が生きている現実とは一体どんなものなのかということに関する主観的なイメージであり、共通理



解の場合もあります。

私たちはさまざまな現実像の認識に立って生きているわけですが、20 世紀ではそれを形成する力はマスメディアが一番強かったわけです。21 世紀になって、それがアルゴリズムにとって代わられた。

アルゴリズムは、藤村さんも携わっておられるニュースアグリゲーターや各種のインターネット技術の源泉です。別の視点で言うと、旧来のテレビ、雑誌、新聞は人間の編集によって伝播する情報を並び替えていた。キュレーションや選択、それらがいまアルゴリズムによって動的に変化していく時代になっています。

毎週木曜日 NHK の「NEWS WEB」というテレビ番組に出演しているのですが、限られた時間の中で限られた情報を出すことのむずかしさを痛感しています。

一方で、スマホ・アプリの中では情報を摂取する場所が乱立している。なかでもフェイスブックやツイッター、最近ではインスタグラムが、私たちが日常的に得る情報の流れを制御しているといえます。

そもそもインターネットが私たちに約束したことは脳の協働だと思うのです。私たちが情報をつくり上げることに對して、インターネットが大きな変革をもたらしたとしたら、それは量的なものであって、本質は変わっていない。私たちが何か情報を、つまり、作品を作ったり表現を行ったりするということは過去のほかの情報を継承して未来に生まれる次の情報、次の表現といったものに影響するという、ネットワークの中での情報というもの、それを通して人間同士が協働していくということ。

## 情報の摂取＞情報の表現

情報摂取と情報表現、そのバランスを保つことが重要だと考えています。インターネットによって情報を表現する力が強まって、「表現の民主化」とも言われました。けれども 2015 年現在、立ち返ってみると、情報摂取のほうが非常に大きくなっているのではないのでしょうか。

そうなってくると、現実像が生成される仕組みを理解すること以上に、現実像が生成される仕組み、それ自体をつくることが重要になっている。

人工知能の話題で、AI (Artificial Intelligence, 人工知能) と、IA (Intelligence Amplifier, 知性の増幅) という対比がよく出てきます。AI には人間の意思決定コストを下げたり、人間がしなくてもいいことを担ってくれたりという非常にいい面もあります。けれども、メディアや情報を考えたとき、どういう力に自分の現実像の形成が影響を受けているのかが、一歩間違えるとブラックボックス化してしまう。つまり、人間の主体性や自己決定性が、実はトレードオフになっているのではないか。そうではなくて人間の知性や認知能力を高めていくものとして、IA が言われたりしています。

私が非常に興味を持っているのは、情報の表現をどう増幅するか、活性化するかです。

## Picsee

私は、そういう研究もしながら、自分の会社でスマホ用アプリをつくっています。

私が会社でやっているのは、プライベート領域でのコミュニケーション・ツールづくりです。Picsee もその 1 つです。今はアンドロイド用の簡易版が出ていますが、iPhone 版が

## 「コミュニケーションの現在とこれから」

メインで、ちょうど去年の今ごろリリースしました。また、一昨日ちょうど発表になったのですけれども、2015年のAppStore Best of Appに選ばれました（拍手）。

Picseeはいわゆるプライベートメッセンジャーの一種です。言葉を送り合う代わりに、写真をパッと撮ると、撮ったその瞬間に写真がグループ内で共有される。撮った写真の上でチャットができる。従来だと、写真コミュニケーションのしかたは、撮ったあと、どの写真を送るか選んで、それをフィルターで加工したりして、最後に送る相手を決め、送る。少なくとも4ステップか5ステップかかるわけです。Picseeの提案は、共有する相手がグループの形で決まっていて、そこでシャッターボタンを押すとその瞬間に相手にそれが届く。非常に親しい人同士、例えば家族とか親友とか、別に写真がちょっとピンぼけしていてもいいよねという間柄であれば、こんなにステップも要らないのではなにか。そういう考えにもとづいて作りました。

例えば、私の娘の写真をひたすら撮っているグループを使っています。ここには私の妻や義理の両親、私の両親が入っています。自分の記録のために撮っている写真が自動的に親にも届くので、一石二鳥で自分のためプラス親孝行がワンタップでできちゃう。もう1年以上やっているのですけれども、このグループの中だけでも8,000枚以上、写真がたまっています。

クラウドにつながっているので、iPhoneの容量を圧迫することはありません。自分のメモ帳代わりに気になるものを撮影するグループをつくって、カレー好きな友達23名ぐらいで、ひたすら毎日「きょう食べたカレーの写真」が上がってきたりします。

非常に趣味の合う友達がいて、その人はお米が大好きで、ほくもお米が大好きなので、「今こんなおにぎり食べているよ」みたいな写真をパッと撮ると、相手からも同じようなものが返ってくる。

Picseeで提案しているのは、ビジュアル・コミュニケーションです。言葉が不要な間柄であれば、いま自分が見ているものをパッとワンタップで送り合えばいい。それは言葉が必要ないという以上に、今見ているものを写真で共有することに意味があり、それによって親しみが増していく。用事がないのに相手に写真を送るということが非常に増えます。それによって、フェイスブックならば写真を送らないような人にも、「今こんなあるよ」というふうに、件名の要らないメールのような形で写真を送る。そういうことが生まれています。

「愛するものについてうまく語れない」。これはロラン・バルトのことばです。

「いま自分はこれを君にぜひ見せたいと思う」という、写真を送ること自体がメッセージ性を帯びて相手に瞬時に伝えられる。そういうコミュニケーションのあり方は実は最初は想定していなくて、作りながら、使いながら発見したわけです。コミュニケーションの形式はまだまだ無数の可能性があると思っていて、一つの機能をつくるだけでも新しい感覚をもたらすことが十分できます。

## 「シンクル」

もう一つ、今つくっているアプリがあります。こちらはiPhoneとAndroidのアプリで「シンクル」というものです。「偏った愛」と書く「偏愛」という言葉がありますが、その偏愛を

パブリックにシェアするサービスが「シンクル」です。

偏愛はなかなか共感されにくいものです。それをフェイスブックとかツイッターで表現できる情報的な強者はいいのですが、そうではない人たちも気軽に非常にニッチでマニアックな話題でコミュニケーションでき、かつ共感を増幅するようなシステム、「編愛」（偏愛を編み出す）を考えています。

たとえば今写っているのは「クリームソーダのクリームとソーダの境界部分が好きすぎる」ですが、こういうのもの他にももっとマニアックなものもたくさんあって、トピックをパッと書くと、そこに共感する人たちが集まってニッチな会話ができる。

各トピックにはタグがつきます。例えば「行為」というタグでは、街の中にいい屋上を探しに行くとか、つい靴を脱いでしまうとか。こういう他愛ないものも含めて、自分が好きなことを誰にも気兼ねすることなく表現していくことはすごく大事だと思っています。それを言葉とビジュアルの両方で発信していく。

「シンクル」は、自分の投稿から自動的に生成される自分の「編愛」の歴史みたいなものに簡単にアクセスできるアプリです。

先日、このアプリを用いて「日本美術とアートの編愛」を集めるイベントを美術ライターの橋本麻里さんをゲストにお呼びして開催しました。ここに集まった40名の人たちはアートに対する偏愛が多いのですが、あまりそういうことをツイッターやフェイスブックで発信しない。理由を聞くと、興味の無い人に読まれるのが苦痛だという声が多い。この「シンクル」という場所があれば、本当に興味のある人にしか届か

ない。そうした既存のSNSの社会的抑圧から解き放たれたコミュニティをつくり上げるということ意識して、つくっています。

今後も「情報の表現」を増幅していくコミュニケーション設計をしていきたいと考えています。

### 情報の摂取く情報の表現

いま早稲田大学の文化構想学部で、スペキュラティブ・デザイン (Speculative Design) という発想にもとづく授業をしています。さきほどミディアムという言葉は、芸術の世界では表現のツールや素材に相当すると話しました。表現のオルタナティブ、情報発信のオルタナティブを提案していく力をアートとかデザインから学べるのではないかと考えています。

長谷川愛さんというスペキュラティブ・デザインを学んだアーティストがいます。彼女は食糧危機問題と少子高齢化問題に対して、女性がイルカを代理出産してそのイルカを食糧として食べるのはどうかというプロジェクトを大真面目にリサーチして提示した。スペキュラティブとは「考えを促す」という意味で、決してこれを社会常識と照合した理想のプロポーザルとして出すわけではない。世界の問題解決が困難な問題に対して、問題解決だけではなくて、その問題の「凝り」を解きほぐすようにたくさんのあり得ない提案もする。

こういうオルタナティブを考えることが、いまアプリの世界でもアート思考、デザイン思考が重要だと言われることに通底しているように思います。芸術というものから学んで、フィクショナルだけれども、プロジブル、あり得るところを攻めて、新しい問題解決の姿を照らし

「コミュニケーションの現在とこれから」

出していく。こういうアプローチも今日、新しいコミュニケーションを生み出すという意味において、非常に希望が持てるものだと思います。

#### 情報の摂取∞情報の表現

最後に、ぼくの好きな言葉を紹介します。アラン・ケイの「未来を予測する最善の方法は、それをつくってしまうことだ」という言葉です。

コミュニケーションやメディアを考える上でも同じことが言えると思います。どうなるか予測することも大事ですが、つくる側、発信する側、表現する側に回ることも、同等に重要なのではないのでしょうか。

#### 講演2 ニュース、メディア、 そしてコミュニケーションの未来

藤村厚夫

ご紹介いただきましたスマートニュースの藤村です。なにとぞよろしくお願いいたします。

スマートニュースという名前の会社であり、「SmartNews」という製品名を持ったアプリを事業の中核にしておりますので、どうしてもニュースという概念にこだわってしまうところがあります。なので、お題としては、コミュニケーションの現在の課題、あるいは将来的課題という方向に向かって、ニュースからメディア、そしてコミュニケーションの方向についてお話しできればと思っています。

#### 私の経歴

私は、ぼちぼちのんびりできる時を迎えたい

と思っているのですが、なぜかあまりそういう穏やかな気持ちになっていなくて、いろいろなことにチャレンジしてきました。

自分のバックボーンやキャリアとしては、メディア、コミュニケーション、そういう世界とITの分野でプロダクトをつくったり、マーケティングしたりというような仕事を繰り返してきました。現在は、スマートニュースという会社でメディアにかかわる仕事を、主にメディアの方々、メディア企業の方々と折衝を通して行なっております。ブログもやっておりますので、よろしければご覧ください。

イントロダクションとして、仕事をする中で私自身がおもしろいなと思っていることを紹介していきたいと思います。

#### 「Twitter」

ツイッターは、皆さんによく使われてよく知られたコミュニケーションのためのツールです。おもしろいことに、自分のことを自分の知り合いに伝えていく行為がいつの間にかメディアになっていく。そういうことがソーシャルメディアの発展の歴史の中で起きてきました。140字で、「きょうはカツ丼食った」「ラーメン食った」と同じように、「こんなニュース読んだ」みたいなことを表現していくと、そこにいろいろな記事が差し込まれて、結果的に人びとがコンテンツを自分なりに編集して人に届ける役割を果たしていく。そういう時代がこの十年ぐらいの間に急激に発展してきました。

#### 「Facebook (News Feed)」

フェイスブックもツイッターと同じように、「きょう何々した」「きょうおもしろかったこと、

これ」みたいなことを、みんな好き勝手に言っているようでいて、例えば「芸術新潮」で谷崎潤一郎の特集を読んで、これは自分の今の気分ぴったり、みたい形で情報を届けてくれる人が目の前に現れてくる。これも貴重なコンテンツを誰かが編集しながら情報を届けるということが無意識にされている。そういうことがシンブルに皆さんがおやりになる時代になってきているのだなと思っています。

### 「Spotify」

日本ではこれからですが、スポティファイには、例えば自分がこの楽曲を聴いて、あるいはこんなアルバムが、こんなアーティストが好きということを繰り返して自分が楽しんでいるものが、多くの人に伝っていく仕組みがあります。「きょうはバーベキュー気分」みたいな形でバーベキューのためのプレイリストが何万種類もできる。天気の良い週末にバーベキューしながらスポティファイで音楽を流していた人たちが、いつの間にか、自分が楽曲あるいはアーティストを選択して人びとに届けるというふるまいをしているわけです。これもすごくおもしろなと思います。

### 「Snapchat」

スナップチャットはご存じでしょうか。日本ではあまりヒットしてなくて、これからなのだろうと思いますが、アメリカで大人気の、LINE に似たようなメッセージングツールです。

10 秒ぐらいの動画を友達に送りつけるという非常にカジュアルなメッセージングツールです。しかもとことんカジュアルであろうということから、送りつけたコンテンツはあっという

間に消えてしまい、もう一度見たいと思っても見られない。人びとの口、あるいはノンバーバルな表現を通じて情報を伝えていくための非常にプライベートな仕組みとして発展してきました。2 億人強のアクティブユーザーを擁する巨大で、若者たちを中心に流行っているアプリです。

### 「SmartNews」

そうした中で、新旧著名なメディアがコンテンツを届けるなかで、逆のことも起きるわけです。人びとのコミュニケーションの中からきちっとした、あるいは深みのある情報が生み出されたり、あるいは伝統ある著名なメディアのほうも、だんだんと人びとに近づいて、そこでカジュアルな情報を届けたりといった、クロスオーバーな時代がやってきている。これも 1 つのメディア、あるいはニュースというコンテンツを運ぶときに起きている新しい動きではないかと思います。

少し、私たちがやっていることをお伝えすると、SmartNews というアプリも、さまざまな分野のさまざまなニュースソースから情報を集めてお見せしています。さまざまなニュースソースからよいものを取り上げてお届けすることが、どんなに革新的なのかを想像していただけるといいのですが。

十数年前ぐらいまで、家で自分のお金で新聞を取っていますと言うと、最大でも 2 紙ぐらい。3 紙、4 紙になると「なにかお仕事ですか」となる。新聞は自分の好きな新聞、例えば読売派とか朝日派みたいな形で大体決まってしまう。1 紙を選択するぐらいが、ふつうの生活をされている方々にとっての情報の範囲だった。



ところが今、それで満足する人がいるでしょうか。つまり、1つの新聞ブランドの記事を丹念に読むことによって世界が見えてくる、社会が見えてくる、歴史が見えてくると信じていらっしゃる方はどれだけいるのか。少数のメディアが作り出すアジェンダの上で自分たちの思考や見解が生まれてくるということを誰もものはや認めていない、自由になっているということを表した1つの製品、プロダクトなのではないかと思います。

### コンテンツとメディアの分離

自分の専門分野で言うと、ニュースとかメディア、コンテンツをめぐる背景に、デジタル化、あるいはインターネット化、あるいはIP化といった、そういうテクノロジーが進展していくことで明瞭な現象が起きてきます。

ドミニクさんも言われたように、今はコンテンツとメディアの分離が起きている時代だと思っています。従来はコンテンツとメディアは表裏一体だった。メディアという媒介項がなければコンテンツは表現されなかった。印刷されなければ人の思考は表現へと定着されなかった。それがデジタルという伝達するものが変わっても人に届くようになった。印刷されたものがウェブで届いたり、あるいはオーディオになったり映像になったりすることが可能な時代がこの10年ぐらいで急激に進んできた。これによって大きな変動が生まれています。

その変動は便利さをもたらしたわけですが、同時に新聞に印刷された情報だから貴重だとか正しいということも言えなくなってきた。かつては新聞だから、テレビだからという、伝達形式によって、信をおける時代があったのですけ

れども、そういうものから良くも悪くも自由な時代がやってきた。逆に言うと、コンテンツそのものを吟味する時代がきているのかもしれませんが。こういったものを総合して「アンバンドル化」（コンテンツとメディアの分離）と呼んでいます。

アンバンドル化が進展するとどんなことが起きるか。例えば、ある執筆者、ある記者、ある作家が1つのコンテンツを自分の頭脳に宿らせて、それを表現していこうとしたときに、何か1つの特定のものに依存することがなくなりました。ウェブになったり、印刷メディアになったり、アプリになったりと、人に届く仕組みを選択可能にし、あるいは恣意性を高めていく時代がきていると思います。

皆さんは、そういうデジタル化によってコンテンツとメディアが分離する時代を意識、無意識に生きていらっしゃる。その良さや自由を満喫する時代に入ってきているわけですが、今後これがテクノロジーの動きによって、もっと進展する領域があると思っています。そこについて、少しだけ立ち入っていけたらなと思っています。

### モバイル化がもたらすもの

藤代裕之さんというあるブロガーが端的に言われています。

「スマホの登場によって、ニュースを運ぶ媒体とコミュニケーション・ツールが一体化して、身体との距離が近づいている」。

非常にさらっと言われているのですが、それでも、「ニュースを運ぶ媒体」と「コミュニケーション・ツール」は今までは一緒ではなかった。ニュースはどこまでいっても専門家が作ったも



のを一方的に送り届けるという形式によって成立してきたビジネスであり、制約の高いコミュニケーションだった。通常のコミュニケーションはインタラクションですので、行ったり来たりする。相互作用という分野に踏み込んできているということだと思っています。

ここにテクノロジーが加わるといろいろなことが起きます。典型的な事象がいくつかあります。いま興味を持っている分野だけを切り取って申しますので、藤村はずいぶん偏ったことを言っていると思っていただいてもいいと思います。

ロボットとメディア、あるいはロボットとコミュニケーション。これは、何かとんでもないことのようにですが、実はひたひたとわれわれの目の前にやってくる。

#### コンテンツが溢れかえる時代に

いまコンテンツが溢れかえているということとは皆さんもおわかりだと思います。つまり、情報がたくさん過ぎる。その1つのポイントは、それらの情報は均質ではないということです。たくさんの多様な情報がある中で自分がほしいもの、あるいは自分がほしいということを超えて価値の高いものとそうでないものを分類したり、選別したりしなければならない。そういう大きな課題にわれわれは直面している時代でもあります。

これにロボットがかかるとどういうことになるか。SmartNewsでは、国際、政治、経済、エンターテインメント、スポーツというカテゴリーごとに、今もっとも多くの人たちから注目され喜ばれているコンテンツが選択・選別され、かつ新聞紙面のようにレイアウト上、大きかっ

たり小さかったりという強弱をつけて表現されています。

SmartNewsでは、これらをロボットがやっています。人間は一切かかわっていません。ロボットはアルゴリズムだと理解していただければいいと思います。人間がやるような知的判断を可能な限り代行できるような対抗概念としてロボットが少しずつわれわれの目の前に、その存在を明らかにしていると思います。

その仕組みを簡単に説明します。インターネット上でこの記事を読んだかとか、あの記事はおもしろいとか、これはすごいねといった、人びとが話題にしている評価情報、それは「メタ情報」(情報についての情報)でもあるわけですが、それらを収集し、判断材料としています。いろいろな言語で書かれていますので、使用言語やその意味を解くことで、この情報、やコンテンツは何について書かれたものか、スポーツなのか、政治の話題なのか、そういった判定をロボットが行ないます。

けっこうむずかしいこともやっています。安倍首相が軽井沢でゴルフをやったという記事が出てきたとき、ロボットは一所懸命判断して「うーん、これは政治のコンテンツ」とみなして、「政治」カテゴリーに分類します。ロボットに対する教え込みが足りなくて、ときどき違うカテゴリーに分類されることもあり、それを、人間が教え直しながらロボットを鍛え上げる。

例えば御嶽山が噴火したとき、百、二百のメディアが、タイトルも本文も違うけれども、要は御嶽山が水蒸気爆発したという記事を書くわけです。そこでSmartNewsのロボットは何をするかというと、その数百もの記事をいったんグルーピング(類似判定)します。その中で最

も評判の高いものを取り上げて、それ以外の数百の評価が高くない話題については1、2歩下がっていただく。そうすることによって御嶽山の噴火に関する素晴らしい記事をいくつか取り上げる一方で、御嶽山以外の記事でも判定ができるようになります。

最終的には、その中でどれが一番注目されているのかをカテゴリーに分類して重要度の高いものから上の方の、目につきやすい場所にレイアウトしていく。新聞で言えば一面のトップにどの記事を書けるかというような編成判定をロボットが行なっています。したがって、24時間365日、われわれはたった数十人の会社ですけれども、全世界で数千万件の記事をあたって、その中の最も注目すべき記事を急いで取り上げるという運用ができる。これがSmartNewsのロボットがやっていることです。

こういうことをやっていく中で重要なことが起きていると思っています。われわれは、たくさんもの、過剰に存在しているものの中から重要な情報を選び出す行為が、社会的あるいは個人的にも重要なふるまいであることに気づき始めています。過剰にあるものの中から最も優れたもの、素晴らしいものを見つけ出す行為が、人間にとって、長い歴史の中ではじめてとても重要な能力、資質になろうとしているのだと思います。そこをロボットのようなものがどこまでサポートできるのか、その能力を強化していきけるのが大きなテーマになるとと思っています。

#### コンテキスト指向のメディア

もう1つ別の観点をご説明します。ようやくコミュニケーションというテーマです。

テクノロジーが発達して無人運用ができるニ

ュースやコンテンツ、メディアができてくると、ニュース、あるいは既存メディアに対する考え方が変わってくる要素があると思います。特にソーシャルメディア時代は、「ハイコンテキスト」という言葉を使わせていただきますが、人間の会話に近い、つまりインタラクションに近い情報配信に近づくだらうということです。

ここにいらっしゃる方はご存じかと思いますが、エドワート・ホルの『文化を超えて』に、ローコンテキストとハイコンテキストという概念がでてきます。

ハイコンテキストとは、共有された認知を前提にしたコミュニケーションです。「あの人、さっきこういうふうなことをしてたよね」ということを念頭においたときに、その人に届く情報は何だろうとか、「あいつ、こういうやつなので、こういうことは嫌いだらうから、これを伝えよう」という判断が非常に高度なプロセスを経てシンプルなアウトプットを行なうということが出てきます。そういうことによって、ニュースのフォーマットも変わる。ニュースのノーマルというものが変わっていくと思います。

どんな人にも同じ情報を届けなければいけないと考えると、すべての人に、ある日、おじいさんが山に芝刈りに行って、おばあさんが川に洗濯に行ったら、どんぶらこ何か流れてきてそれを取り出して桃太郎を発見した、というプロセスを最初からすべて紹介しなければいけないわけです。おじいさんが山に芝刈りに行っていることをハイコンテキストの中でお互いが知っているとしたら、そこで伝えることはもっとシンプルでいい。「そこに桃太郎が流れてきたんだよ」と言えば十分です。あるいはその後、桃太郎はどうなったかだけを伝えればいい、そ

うということが可能になってくるわけです。

これは人間同士のコミュニケーションに使われているにもかかわらず、マスメディアは一切そういうことをしていません。これからは、この溝が埋まる、もしくは埋められるような存在によってマスメディアの役割が変わると思っています。

### ロボットジャーナリズム!?

1つは、ロボットがジャーナリズムを担う分野ができてきます。これは笑い話でもなんでもなくて、すでにAP通信が「ワードスミス (wordsmith)」というテクノロジーを使って、つまりスポーツの試合の実況中継をロボットが執筆して届けるということをやっています。あるいは企業の業績開示、例えば四半期ごとに開示される情報で、どの会社がどのくらい利益を上げたというような比較的定型的なニュースを、ロボットが執筆してもものすごい速さで届けられます。

ここで言えるのは、ロボットはどのくらい深いコンテンツをつくれるんだい？ という話ではなくて、一人ひとりが興味のある分野、例えば地元の中学校や高校の野球の試合の実況中継とか、マスメディアが届けられない情報を自分のために届けてくれることができやすくなってきます。それは親密な関係にある人間同士の会話に似てくるということです。

### 女子高生りんな

「女子高生りんな」、皆さん知っていますか？ これはLINEでばちばち使われ始めていて、実はマイクロソフトのR&D部門がやり始めたもので、いくつかの分野に応用されているようで

す。昔、人工無脳といって、何か質問すると当たり障りのないどうでもいい返し方をする仕組みがありました。それが今は、ロボットを使うことでかなり高度な会話ができるようになっていて、LINEを通じて女子高生（もどき）の友達ができるというわけです。くだらないことでも、何か聞くと一応それらしく返してくる。人工知能を使って一人ひとりの情報のやりとりで最適化されたコミュニケーションができる。

実は、ニュースではけっこうこれが重要になってくると思っています。例えば運転中、ニュースを知りたいときに、キーボードは使えないので、「あの試合、結果どうなったの？」と聞けば、試合の結果を教えてくれる。それによってかなりの部分のスポーツニュースを代替する可能性が出てきています。

もっと会話に近づいてくると、毎回その情報を聞くのに、「ある日、おじいさんが山に芝刈りに行って」という部分は不要にしてもらって、「桃太郎がその中から出てきた」というところだけ伝えてくれるとか、その後桃太郎はどうなったのかということだけ教えてくれるとか、人と人がコミュニケーション、会話する中で生み出されるハイコンテクストな情報の届け方が、テクノロジーの介在で可能になってきます。

そんなことでメディアの進化が生まれるはずはないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。これまでニュースは1対多、つまり多くの人にマスプロダクトな情報として届けることにこだわって作られてきました。自分だけに教えてくれる。例えば、8回裏まで巨人が勝っていることを知っている人に、「その後こうなったんだよ」という話を届けてくれる。そういうことについて、これまでニュースは無力だった。

「コミュニケーションの現在とこれから」

しかし、こういうものが生まれて、最初はお笑いだったり、つまらないことに使われていたりしても、その先に何が起きるかはわからない。これはコミュニケーションに近づくニュースのあり方を示唆していると思っています。

#### 「Facebook M」

フェイスブックのメッセージ機能を使って、例えば「ピザが食べたい」と言うと、ピザを届けてくれるような仕組みを、サンフランシスコ近郊でトライアルしています。その裏には人間の判断が介在していますが、SmartNews同様、人間が機械でできることに対してひたすら精度を上げる役割に徹することによって、いずれ機械が人間のやらなきゃいけないシンプルな手続きを踏めるくらいのことはできる可能性は高いと思っています。

#### 良質な情報を届ける

SmartNewsは、コミュニケーションに近づくしていくニュースのあり方も考えています。こういうことを考えながら、素晴らしいコンテンツを届ける仕組み、その発展を目指していきたいと思っています。その背景には、われわれの創業者の理念にもあるように、世界じゅうの良質な情報がまだまだ的確にそれを必要としている人に届きにくい、届いていないという思いがあります。増える一方の情報と、その中で価値の高い情報を必要とする人、限られた時間の中で最も大切な情報を大切に受け取りたいという思いのある人に、そうした情報を届けていく仕組みがいつか実現できたかなあとと思っています。

### 講演3 別の天と地

#### —コミュニケーションの現在とこれから

荻野 NAO 之

20周年おめでとうございます。

95年というと、ちょうど私が名古屋大学に入った年で、何となく思い返しやすい年ですけれど、大学に入っていきなりヘンな紙切れを渡されました。そこに@マークのついた記号が書いてあった。「これは何なんだろう」と思ったのですけれども、それがメールアドレスでした。その下に訳のわからないアルファベットが並んでいて、「これは絶対になくすな」「再発行できない」と書いてあるわけです。メールを使ったこともないし意味がわからない。大学に入ると、こういう世界があるんだと思った非常に印象深い出来事でした。ところが、それは前の年の新入生にはなかったことで、われわれの代が初めてもらったわけでした。浪人時代の友達に聞くと、大学によって配布されているところとまだのところがあった。そんな記憶を思い返しました。

写真家として紹介を受けました。きょうはイメージを前面に押し出して講演をするか、文字だけにするかで悩んだのですが、あえて文字だけのほうを選ぶことにしました。文字だけといっても、これからお見せするスライドは覚え書きみたいなものです。

いただいたお題は、まず自分がこれまでコミュニケーションをどうしてきたかということについて話してほしいといわれたと認識しています。その次に、コミュニケーション学の未来について何か思うことがあれば言うようにと。私

は「学」から離れた場所にはいるのですが、それを踏まえてお話ししようと思っています。

#### はじめに：【別の天と地】

「別の天と地」……。何だろうと思われるかもしれませんが、こんなところから始めたいと思っています。

「遊ぶ」という言葉があります。ふつう「遊ぶ」というと、パチンコをして遊ぶとか、ゲーム、スマホで遊ぶとか、そういうふうに使われていると思います。ぼくが使っている「広辞苑」には、一行目に「日常的な生活から心身を解放し、別天地に身をゆだねる」ことであると書いてあります。なんか大仰なことになったなということなのですが、どの辞典も大体かわりはないのではないかと思います。

私の大好きな白川静さんという学者がいらっしゃいます。立命館大学の先生で、古代漢字研究の大家、『万葉集』の研究もされている。白川さんが編まれた『字訓』という素晴らしい辞書で「遊」という漢字を調べると、「住む土地を離れてほかに赴くときには人びとはその氏族の霊が宿っている旗を押し立てて進んだ、その象形の字である」とあります。これを大和言葉のほうに持ってくると、『万葉集』で「遊ばす」は、神として行為をすることであると、また大変仰々しい話になります。

「遊ぶ」について話したのは、これがコミュニケーションと関係があるのではないかと思います。私とドミニクさんの日本語は同じ日本語なのかどうか。藤村さんの日本語は同じ日本語なのだろうか。もし違うとすると、やはり、そこに別天地があるはずで、会話するということは相手のことを理解しなければいけ

ないので、相手に自分をゆだねないといけない。そのような話を、自分の過去から紐解いていきたいと思っています。

#### 自己紹介に代えて：【私とコミュニケーションの私？】

##### 漂流する母語

「あなたは何語で考えてるの?」。ぼくはこの会話を覚えてないのですけれども、母親が7歳のぼくに発した質問だそうです。私は東京生まれとなっていますが、3歳のとき父親の転勤でメキシコに行きました。ぼくの記憶は実はこのへんから始まっているので、それまでの日本の記憶はほとんどありません。メキシコのクエルナバカという田舎町で現地の幼稚園に放り込まれました。かすかな記憶をたどっていくと、メキシコ人の友達としゃべっている。確かにメキシコの幼稚園で、家に芝生があって、日曜日には元射撃部の父親が広い庭で向こうにビール缶を置いてバーンバーンとやっている。そういう記憶があるので、これはやっぱりメキシコだなと思う。日本でやったらまずいですね。

メキシコで日本人のサラリーマンが暮らす場合、給料の水準がメキシコの物価と比べていいものですから、女中さんを雇えます。女中さんはスペイン語しかしゃべれない。ぼくは女中さんと遊んでいるのですが、その記憶はいま日本語でしか思い出せない。

とりあえず7歳のときに日本に帰ってくることになって、そのとき母親が「あなたは何語で考えてるの?」と訊いたらしい。それに対して、何を訊くんだ? 「スペイン語に決まってるじゃん」と日本語で答えたらしい(笑)。多分、母親が言った日本語をぼくは頭の中でスペイン語



に変換してスペイン語で考えて日本語で答えた。「何てバカなことを訊くんだ」といったふうな反応だったらしい。これがぼくのバックグラウンドです。

メキシコに行ったときは3歳で、当然日本語しかしゃべれなかった。それが、スペイン語に切り替わった。そうして、7歳で日本に帰ってきました。日本語は一応しゃべれたのですけれども、なにかちょっとヘンだったんでしょうね。しかし帰国して3ヵ月でスペイン語を全部忘れて、全部日本語になった。その後、小学校5年生まで日本にいて、またメキシコに行くのですが、そんなふうにしてぼくの母語は漂流して何が母語なのかわからない。いまは一応日本語と言っておきます。

#### 言葉の通じないメリット

そういった中で何か言葉ではないものを感覚として感じ取るという癖をつくってきたのだと思います。それを写真家としても使っている。

あるときペルーの奥地で馬に乗って旅をしていて、女の子に出会った。馬で1時間、2時間きたし、その周りに何もなくて、川が1本あるだけ。どうやって生きているのだろうと思うような場所に親子4人が暮らしている。写真を撮りたいと思ったのですが、彼らはスペイン語が話せない。ふつうは困ったと思うのですが、実はけっこう困らない。というのはこのケースに限らないのですが、「写真を撮らせてください」と言って言葉が通じると、もう明確じゃないですか。1回「イヤです」と言われたらアウトで、この1回の「ノー」を覆すのは非常に大変です。「もうノーと言ったし」と、相手も「ノー」とジャッジした以上、そのノーをイエ

スに戻すための理由がなければ絶対にイエスにしてくれない。

言葉で「撮らせてくれ」と言えないし、向こうも「ノー」と言えない。ちょっと撮ろうと思って「イヤ」をされると、あ、駄目なんだなと思って、その女の子の横に行ってボーッとしている。この子は何を見ているのだろうかと思っていると、女の子も、ずっと横にいるから「なんだ、この人」とチョロチョロ見てくる。「カメラ見る？」という感じで女の子の前にカメラを出すと、「うん」と言ってくる。押してごらんよと手振りすると、手で触ったりする。そうやってだんだん仲良くなっていったカメラを向けると、またイヤというふうなジェスチャーをするけれども、まんざらでもない。あれ？ 気がつくまで撮れている。

これを日本人の子供にできるかというと、できない。ぼくが日本語しゃべれませんかと嘘をついてやれば、明らかにヘンですね。しゃべれることによって「ノー」をもらってしまう。しゃべれないことによって「ノー」が出てこない。そうすると、「イエス」にたどり着ける。しゃべれないことがメリットになっている。

インドネシアのシャーマン村は、インドネシア人でも近づかない怖いところですが、みんな黒い服を着ていて、電化製品を一切使わない。ふつうは外の人が入ってはいけないのですが、たまたま知り合いの知り合いがそのエリアの元王族の末裔で文化人類学者だったので、彼は入れた。その人に頼んで入れてもらった。外国人はぼくが多分1人目か2人目です。電化製品はダメだと言うけれども、ぼくの使っていたカメラはライカで、「これは電化製品ではない、機械だ」と言って、「まあ、よし」ということ

になる。

黒い服を市場で買って黒ずくめの格好で入って行くと、そこは、映画『もののけ姫』の世界というか、釘1本ない。全部竹だけで、竹で編んで柵をつくり、家も高床式住居で、大統領の家だといわれたその家が一番ぼろい。大統領は財産を持つてはいけない。

そこに大臣みたいな人がいて、映画『風の谷のナウシカ』でナウシカのお城の中で、お父さんがいろいろな人たちとしゃべっている、あの雰囲気があるのです。大統領と言われている人のお母さんが横にいて、ものすごいシャーマンらしい。ぼくとしては写真を撮りたいのですが、とりあえず一緒に行った日本人を通じて日本語でお願いしてインドネシア語に訳してもらい、それを文化人類学者の人が現地の言葉に訳してということで通訳をしてもらった。すると、当然「ノー」が返ってくるわけです。「ダメ、今まで写真を撮らせたことがない」。聞かなかったことにしよう……、直接コミュニケーションしていませんから。

しょうがないので、お母さんの横に行って、このおばあちゃんは何を見ているんだろう、と思ってボーッと見ていました。これは本当にぼくの勝手な思い込みかもしれないのですが、横にいて、ある瞬間にパチンと開いた感じがしたんです。おばあちゃんがこちらをふっと見て、何かどこかで会話が通じたという感じがした。今なら大丈夫だ、あっ、撮らしてもらえと思って、カメラのある場所に戻って、駄目だったら駄目というジェスチャーをするだろうと思ってカメラを持ち上げたら、もう駄目とは言わない。じゃあ撮らしてもらおうと思ったら撮れる。ぼくとしては、おばあちゃんと会話をしている

つもりです。大統領はじめ周りは凍りついていました。1本撮って、フィルム交換して2本撮って、まだ撮り続けて3本目が終わったぐらいで、おばあちゃんも、「まあもういいでしょう、あんたはもうそれだけ撮ったし、もう疲れたし」みたいな。ということで通訳を介して返ってきた答えが「撮ってくれてありがとう」だった。

ひょっとしたらぼくは悪いことをしたかもしれない。どちらにしても言葉が通じないメリットがある。まあ勝手な思い込みかもしれません。

## 121 カ国の人との交渉

広告会社に勤めていたとき、ジョイントベンチャーを組んで愛知万博全体のコミュニケーション・システムを受注しました。ぼくはプレゼンテーションのときからずっとかかわっていて、初めてマルチソース、マルチユースの情報発信をする全体の編集室を設計して、サーバーも全部入れて、インフラも全部引くというプロジェクトでした。つまり、いろいろなところから情報を収集して、それをPDA (Personal Digital Assistant) とか、携帯とかパソコンに情報を流すみたいな仕事をしていました。シフトを組んでやっていたので会期中、休みがあった。午前出勤のときは午後、午後出勤のときは午前、休みの日は一日中空いている。

万博会場をうろうろしているとおもしろい。何がおもしろいかというと、大したお宝はないんですけども、ぼくにとってのお宝は、その国からきている人々。どのパビリオンにも必ず現地の人がいる。121 カ国のパビリオンがあったので、121 カ国の人々がいた。そのことに8月末ぐらいに気づいて、9月末で万博は終わっ

てしまうので、あることをやってみようと思ったのです。休みのときに、すべてのパピリオンを回って交渉して、1つの国一人、ポートレートを撮らせてもらうことにした。つまり、121カ国の人たちと会話をしたのです。

どこから攻めようか。これが大変で、やはり、お国柄で全然違う。例えば、A国パピリオンに行くと、広報担当者に断らなければいけないと思って、「万博会場で働いている者だけども」みたいなところから話し始めて、「ぼくはきょうは個人で来た。写真家なんだ。こういうことをしたい」と広報の人に全部しゃべる。すると、「うん。なるほど。それはおもしろい。わかった。誰が撮りたい?」。「まあ誰でもいいけど、じゃあ、まあ、今たまたまあそこにいる彼女」。

広報の人が彼女を呼ぶ。広報の人が自分の言葉でぼくが言ったことを彼女に伝える。「こいつはこうこうこういう人間で、今こういうオファーをもらった。A国パピリオンとしてはこれを許可するから、あとは君の問題だ。君がオーケーするんだったら撮ってもらいなさい。君が駄目だったら断ればいいから」と会話するわけです。

いろいろな国があるので一応モデルリリースというサインをもらうための紙も用意して、「これももらわなきゃいけない」と言ったら、彼女は「あ、いいですよ」と言って写真を撮らせてくれた。

C国。広報へ行き、話をしました。「おお、おもしろいじゃないか。ほお、その紙は何だ」。「いや、これはモデルリリースとって撮らせてもらうためのサインで……」と言って見せたら、英語で書いてあるのですけれども、「ふーん。おれはどこにサインしたらいいんだ」。「い

や、あなたを撮りたいわけじゃなくて、誰かパピリオンのスタッフを撮りたいんだ」。「いや、いいから、おれはどこにサインしたらいいんだ。この保護者のところにサインすればいいのか」。「いや、保護者というのは未成年用なんですけど」と言ったのに、パッと保護者のところにサインしてしまう。「おれサインしたから、おまえ、誰でも撮れるぞ。おれがサインしているんだから大丈夫だ。好きなやつ撮れ」と言う。

たしかM国の女性だったと思うのですが、撮らせてもらったのですが、サインをもらうにあたって悩んでいる。「実は私の神様が、遠い異国の地に自分のイメージを置いてきちゃいけないって言ってるような気がする。ちょっと考えさせてほしい」と言って、撮らせてはくれてもサインはしない。1週間ぐらい経ってから連絡がきて、「大変申しわけないけど、やっぱり神様が駄目って言ってる気がする。だから代わりに友達を紹介するから」と言ってほかの人を紹介してくれた。

121カ国のうち何カ国が「ノー」と言ったでしょう? 3カ国。1つめ、これはしょうがない、K国です。宗教的な理由ですね。基本的に肖像は駄目。宗教的に駄目。もう1カ所はB国で、忙しいからと。そしてもう1カ所は日本です。驚かれましたか。個人からのオファーを想定していなかったのでしょうか。誰にどう許可を取ったらいいんだという雰囲気、一週間以上待たされたすえ不許可とのことでした。国連は大変だなと思いました。万博は、みんなパピリオンで自分の国のPRをしたいためにきているのですから基本はオーケーでしたが、ここに政治、経済が絡んだら大変だなと思います。

光が描いてくれるコミュニケーション

写真は光がないと撮れません。光のグラデーション。特にぼくはライティングしませんので、その空間の中でグラデーションのきれいなところ、いい光があるところを探して、そこにモデルを連れて行くかという、それも嫌なので、モデルがそこを通るまで待つ。

「あー、もうきょうは曇ってて駄目だな」と思っているときに、光がパッと差す。そういうときに自分の心が晴れたりする。「ああ、よかった。いい光が出た」と。これも非常に主観的な話ですが、被写体に伝染するようです。結局、それは誰がコミュニケーションしてくれたのか。ぼくなのかというと、ぼくではなくて、どうもお天道さんです。

メキシコから日本へ帰ってきたときに、「この国はヘンな国だな」と思ったのは、みんなが天気の話をする。「あー、きょうも晴れたわねえ、直之君」とか、隣のおばちゃんが言う。「あー、きょうも雨で大変だわねえ」とか。あれは何なんだろうと思ったのですが、考えてみたら、意外とそういうことだったのかもしれない。そこで何かシンパシーを探っているとか、何かに同調して、そこからコミュニケーションに入っていく1つのスキルなのかもしれないと写真の現場で感じました。ノンバーバルとバーバル、あとお天道さんに任せたコミュニケーションという話です。

コミュニケーションの私？

「私とコミュニケーションの私」のどこに点を置くかという、ぼくとしては、「私と」のあとに点だと思っています。「私と、コミュニケーションの私」。これはさっき、ドミニクさ

んがおっしゃったことに近いと思いますが、主観で立ち上がるものであるという理解です。

この間もある学者の人と話をしていた、つい乗せられてしゃべっちゃうわけです。しゃべっているそばで、ぼくは「へえー、そうか。自分はそんなことを思っているんだ？」と思うわけです。ひどい話かもしれませんが、皆さん、「ええ？」と思われるかもしれませんが、そんなものです。

今日も実は原稿を用意していません。いまでも勝手にここで思いついたことをしゃべっている。いつもそうなんです。そのときもそうで、「あ、あー、このキーワードいいじゃん」とか「あ、そうじゃん」と思う。それは相手が引き出してくれたわけです。その人に会わなければ、そのタイミングでなければ、そのキーワードは出てこなかった。コミュニケーションで立ち上がった私なのです。

写真の場合だと、これはいい写真なのかどうかかわからないけれども、とりあえず撮って、将来に委ねる。セレクトするのは将来です。半年置いておいたり、1年置いておいたりして、「さー、そろそろ重い腰を上げて、あの中からピックアップしようか」と、そのときの自分が見つけてくれればいいやと思う。だから今、これはいい写真なのかどうか、これは何なのかというのは関係なく、「あっ」と思ったら撮るようにしています。「あっ」の瞬間は、もう戻ってこない。「あーっ、やっぱりあのときのあれがよかったんだ！」と1年後に思っても遅いので、「あっ」と思ったら撮る。

「ルパン三世」を描いたモンキーパンチさんってすごいと思うのは、登場人物の一人の石川五ェ門に、いつもすごい台詞を吐かせるんで

す。

斬鉄剣で、彼はルパンにいろいろなものを斬らさせられるわけです。そこで彼が言う言葉が「またつまらぬものを斬ってしまった」。

写真も、シャッターを「切る」と言います。あ、すごいなあ、あの人、よくわかる。ばくも本当に同じことを思うのです、「またつまらぬものを切ってしまった」と。大体シャッターはいつもそんなものなのですから、まあ千枚か1万枚に1枚でもいいのがあればいいので続けていますが、それを引き出すのは未来の自分。

もう1つ。私は、日本語と英語とスペイン語をしゃべりますけれども、例えばアーティスト・ステートメント、何か説明するための文章を書くときに、どの言語で考えるか出てくるものが違う。適当なやつだと思われるかもしれませんが、違うのです。タイトルを日本語にするか、英語にするか、スペイン語にするか、ラテン語にするか。ラテン語はしゃべれませんが、タイトルでたまに使います。それによって道筋が変わります。写真のセレクトまで変わってしまう。結局、言語によって自分が変わってしまう。そうすると「私」とは何かというと、「コミュニケーションの私」という、そのときによっていろいろな色が出てきてしまう。

「コミュニケーションの私」はどこにいるかという、別天地にいるのではないかと思うわけです。自分の中に私はいない。どこかに行っちゃってしまっていて、身を委ねたら「わー、自分がこうなった」みたいなことです。「私の私」と「コミュニケーションの私」とは違う。

探求に向けて：【コミュニケーション学の限界とコミュニケーション学】

言語の海溝

もう1個いただいたお題がありました。それはコミュニケーション学の課題です。

この間、神戸のカナディアン・アカデミー、もともとカナダに関係していたインターナショナルスクールですが、そこで話をしました。

学生は当然、全員バイリンガルですから、「バイリンガル的人是手を挙げて」と言っても意味がない。そこで「トリリンガル的人是手を挙げて」と言ったのですが、それでもパッと手が挙がる。「4ヵ国以上の人……」と言っても、まだ手が挙がる。

彼らにこの話をしたらすごくわかってもらったのですが、言語には狭間があって、英語でも日本語でもしゃべれない領域がある。英語では言えるけど日本語で言えない。日本語では言えるけど英語で言えないことがある。これがわかってくると、どちらでも言えない空間が見えてくる。「みんな、わかるでしょ」と言うと、みんな「ああ、ああ、ああ」とか、「うーん」と言う。これを、モノリンガルというか、1つの言語の人に伝えるのは非常にむずかしい。言語で救えない亀裂みたいな、日本海溝みたいなところがあって、それは言語だけではなくて、イメージとか感覚にもある。

たまに子供がウワーッとかやっているじゃないですか。説明できなくて「ギャーッ」みたいな感じの……。多分われわれも子供のときにやっていたと思います。親に何か言われて「ウワーッ」と思うけど、言葉でも言えないし説明もできない。エネルギーをどこに持っていけばいいかわからないから、とりあえず何かバーン



と割るとか。子供は言葉が未発達だからと言ってしまえばそれまでですが、では、われわれはもう発達し切ったかという、ちょっとそれも怪しい。ぼくの場合は、まだ自分の日本語が発達し切ったなどとはいえないので、相変わらず同じ状況です。子供のときの、伝えられない状態、あの「ウワツ」が一番ぴたりくるのが、その亀裂です。写真家も全部を表現できるわけではないので、イメージにも亀裂がありますし、感覚にもある。

歴史からわれわれが学べることは、……

20 周年の本の中で川浦先生も引いておられましたけれども、歴史からわれわれが学べることは何だろうか。それは、歴史からわれわれは学べない、ということ。アインシュタインの言葉を借りると、「人間は、『歴史から学ばない』という事実を直視しながら生き繋いでいくべきであり、これを忘れ、あるいはないがしろにしたとき、人間の時代は終わるだろう」と。

これは相当強引な並べ替えになりますが、「歴史」を「学問」に、そして「学ぶ」を、語源にさかのぼって「真似る」「真似する」に変えたらどうなるか。「学問からわれわれは真似できない、学問から真似られない」となります。これは本当だと思うのです。

実は、学問がわれわれを真似している。まずわれわれがあるわけです。かつて、あれは何なのだ、あいつを理解しないことにはどうにもならない、じゃあというので、学問が始まったのだと思います。ということは、われわれが学問に従属しているのではなくて、われわれが主なんです。学問は従。学問があとからついてきて、うん、まあぎりぎり 80 点まできているじゃな

いか、いいじゃないか、と。そうしたら、そろそろ使おうかと。そういう関係です。

やはり、われわれが主だと思います。コミュニケーションはまさにそうで、さきほどもいろいろなデバイスやアプリの話が出ましたけれども、これまでなかったデバイスやアプリが出てくると、これまでなかった使い方をする。なかったものが出てきているのですから、学問は絶対に追いつけません。そのときに過去の学問の 80% のところに学ぼうとしてもわれわれのほうが先にいます。ひょっとしたら、ぼくよりも学生のほうが先です。ツイッターの使い方とか、新しいソフトの使い方は絶対学生のほうが早い。

学問が無用だということではなくて、やはり、われわれが主ということです。学問は常に頑張ってきている。頑張って 90% ぐらいまではきているけれども、われわれの中に学問がたどり着けない未知の海溝があったり、言語がたどり着けない海溝があったり、それをわれわれは持ってしまっている。それを受け入れた上で、では、それとどう楽しもうか、どう遊ぼうかということが大事なのではないかと思っています。

探求できない無限の領域がある。物理学でも、ダークマター、ダークエネルギー、90% かなにかまだ見えてませんし、自分の母語とか所属している文化の性癖は全然見えてこない。特に一つの言語しかしゃべれない場合はそうです。

少し前になりますが、ある新聞に半年間の約束で新聞評を書いていました。朝夕刊が毎日送られてくるのですが、それを読んで月 1 回批評を書かなければいけない。8 月、戦争に関連する記事がいろいろある中で、ひたすらいろいろな事例を置いて「歴史に学べ」と書いてある。原爆から学べ、特攻隊から学べ。1 ヶ月間毎日

見ましたけれども、新聞のどこにも「なぜ戦争が起きたのか」は書いてない。それでどうやって学ぶのでしょうか。

周りのことには目がいても、コアの部分がごそっと抜けている。「なぜ」という一番シンブルで深い答えがない。そこだけが見えない。そしてそのこと自体に、気づかない。「学ばなきゃ、学ばなきゃ」と言うだけ。そういう日本人独特の性癖を知っていないと、学びようにも学べない。そういうこぼれ落ちてくるものとどうつき合っていくのか。今後もコミュニケーション学に必要なことだと思います。

#### 一億総カメラ人時代の、ビジュアルリテラシー共育

「直」は、殷の時代ぐらいからある漢字で、ほとんどシャーマンたちの記述からきていますが、目の上に呪文を高める飾りをして、前に楯を置いて物を見るらしいのです。なぜそんなことをするのか。「見る」は、おそらくただ見ているということではないと思うんですね。「見る」には、霊を直（ただ）すという意味がある。悪霊がいて、それを「見」たら相手を直せるぐらいのことを過去の人は思っていたし、負けたら自分がやられると思っていたかもしれない。見ることで直（なお）ってしまう。漢字の直は、直（なお）すという和語でいくと、平常心の中に常に正しい状態が続くという感覚があるらしい。何か直（ただ）すとか整えるというのが、「見る」ということにあるらしい。

みんなスマホを持っていて、それで写真を撮りますけど、そういう時代になったとき、ビジュアル・リテラシーをちゃんと教えていかなきゃいけないんじゃないかならうかと思っています。

例えば、写真で食っていきいたいと言うと、「へえー、すごいね、いいね」と言われる。だけど、鉛筆で食っていきいたいと言ったら、「へえー、すごいね、いいね」とは言われないんですね。

写真はフォトグラフィなので光で描く。鉛で描くか光で描くかだけの違いなんです。鉛筆は鉛で描く。光で描くのはフォトグラフィ。だけど、写真というと、みんなそれで「あー、もう、なんか」ってなっちゃってるんですね。

「鉛筆で仕事をしたい」と言ったら、たぶん親に、「バカ。おまえ、何言ってるんだ」と言われる。「じゃあ、おまえ、コピーライターになりたいのか、小説家になりたいのか。小説家なら、直木賞作家なのか芥川賞作家なのか。それとも説明書を書く人間になりたいのか。それとも法律書くのか。何を書きたいんだ、おまえ。鉛筆で仕事をするって何の仕事だ？」と言われる。

「写真で仕事をしたい」と言ったときは、誰もそういうことを言わない。当然、写真の中にもそれはあるんです。コピーライター的な仕事、直木賞作家的な仕事、芥川賞作家的な仕事、法律的な仕事。それを全部「写真」と言って終わっちゃっているんですね。そのカテゴライズもわれわれはできない。ということは何が必要か。それがビジュアル・リテラシーである。

コミュニケーション学の中で、このビジュアル・リテラシーいかに整え、小学校や中学校でどうやって教育システムに組み入れていくのか。いま誰もが写真を撮るんです。ぼくの姪っ子も甥っ子も、タイプがまだできなくてテキストなど打てないのに、写真は共有しますからね。お母さんのヘンな写真をパチャッと撮ってLINE

で送ってきます。文章ないですよ。「君、その写真をこういう状況で送っちゃ駄目でしょ」ということを言わなきゃいけない。内輪だったら楽しいですけども。

ビジュアル・リテラシーが必要じゃないかということをお話して、終わりにします。

皆さん、人生でどんな遊びをしたいですか。さきほど媒介という話がありましたが、あなたはあなたにどんな遊びを、何に向けて遊ばせますか？ どんな別天地で、何を媒介に？ それを考えることは、コミュニケーションにとってけっこうおもしろいんじゃないかなと思っております。

### パネルディスカッション

司会 第2部、パネルディスカッションに移ります。パネルディスカッションは、講演者に加え、本学より桜井哲夫、佐々木裕一、深山直子を交えまして議論していきたいと思っております。

まずドミニク・チェンさんの講演に対して、桜井先生、コメントをお願いいたします。

桜井 私がこの大学に赴任したのは1981年、ドミニク・チェンさんがお生まれになった年です。

80年代にこの大学に赴任して、1985年に書き下ろして『ことばを失った若者たち』という講談社現代新書を上梓しました。この書物のテーマは、コミュニケーション障害、つまり、お互いのコミュニケーションがおかしくなってきたという話です。

いわゆる若者文化の中での問題、このころ「ニジコン」という言葉がありました。2次元

コンプレックスといって、アニメやマンガのキャラクターに恋をするという若者の話です。あるいは小学生の間での単語会話。「先生、紙」とか言って、つまり、文章として整っていない会話みたいなものが出てきて話題になりました。つまり、若者の間でのコミュニケーションが変わってきたんじゃないか、いろんなトラブルが起こってきているんじゃないかということが話題になった当時に書いた本です。

そのころ私は村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』などの分析をした論考を「中央公論」(1983年9月号)に書いていて、それを見た講談社の編集者から、若者論を書いてみないかという依頼があり、それで書き下ろしました。

『風の歌を聴け』も基本的にコミュニケーションの問題を扱った小説です。少年がコミュニケーション障害になって、一切しゃべらなくなっちゃう。精神科医のところへ行くと、精神科医がクッキーを出して、「お腹がすいているからこれを食べたい、と君が言わなければ、これは消えるよ。コミュニケート、伝達というのはそういうものだ」。オンとオフ。「つまり、君が食べたいと言わなければこの食べ物消えるんだ」というふうな形でコミュニケーションについて解説する話が出てきます。明らかに人と人とのつながり方がおかしくなっているということは、当時の認識としてあったわけです。もちろんデジタル化なんていうことばはない時代で、ネットも出てこない。それから10年経ってネットが現れてくるわけです。

そこからずっと進展して、コミュニケーション・ツールが大きく変わってきたことは事実だとは思えます。けれども、人間関係に大きな変化があったのかというと、基本的に30年前

## 「コミュニケーションの現在とこれから」

と問題はそれほど変わっているわけではない。

情報環境は確かに変わりました。デジタル化が進んだということは間違いなくあります。特にメディアのあり方はものすごく変わりました。30年前でしたら、マスメディア、新聞やテレビの力は非常に大きかった。そのため一般に情報伝達、あるいは情報を得るためには、マスメディアに依存せざるを得なかった。昔の資料を調べるためには図書館に行かなきゃならなかった。国会図書館に行ったり、雑誌類なら大宅文庫に行ったりして検索しなければならなかった。

今はネットでいろいろな形でコンテンツを利用することができるけれども、そのころは動き回らないと得ることができなかった。二十数年前パリにいたときには古本屋をぐるぐる回って、古本を集めたし、日本でも動き回らないと情報は収集できなかった。いまは「日本の古本屋」というサイトにいけば、どこの古本屋にほしい本や雑誌があるかわかるわけです。ところがかつては、ある種の肉体労働で情報を集めなければならなかった。そういう大きな変化はあります。

さきほどドミニク・チェンさんがテロの話されました。情報ツールは発達したけれども、基本的に民族間のいがみ合い、宗教間の対立、それから情報格差、貧富によるディスコミュニケーションは一切変わってない。あるいは子供たちの間でのいじめや引きこもりといった問題も変わっているわけではない。問題は持続しているのです。

コンテンツの提供とか受容、それを享受するところでは変わっているけれども、例えばデジタル・ディバイド、15年くらい前はネットにアクセスすることができるのは北米とヨーロッ

パで半分くらい占められていた。もちろん、この15年で中国が進出してアジアの状況も変わりました。デジタル・ディバイドも含め、ツールの提供、それを享受することに関しては大きく変わった。確かにアルゴリズムの力によって従来の現実構成が20世紀と変わり、21世紀は新たにネットが提供してきたものがさまざまあることは事実だろうとは思います。しかし、本質的な意味での人間関係、相互の関係、それは言葉と言葉の問題なのか、身体的相互作用の問題なのかも含めて、基本的な部分は変わってない。

人間コミュニケーションの大本は身体表現だと思っています。「私はおまえを殺さないから、おまえも私を殺すな」。ある人類学者が人間の言葉の起源をそこに求めています。私は、非常におもしろい指摘だと思っているのですが、われわれのコミュニケーションの根本、つまりお互い殺し合いをしないで済むようなコミュニケーションのあり方、「私はおまえを殺さないから、おまえも私を殺すな」という原初的コミュニケーションから考えていかないと、コンテンツの提供や、媒介手段が発達しても伝達はされない。

さきほど、「媒介しても伝達はされない」という貴重な発言がありました。まったくそのとおりで、ネットでさまざまな形で情報を共有して、そこから知識を膨らませてお互いの共通理解を高めるだけではなく、相手に対する憎悪を無限に膨らませることも可能になっているわけです。やはり、その問題は変わってないだろうと思っています。

もう1つ、チェンさんは著書の中で語っておられますが、権力による情報操作の問題、例えばNSA (National Security Agency) というア

メリカの情報組織が全世界で盗聴しているという問題、それを告発したスノーデンの活動にも触れられていましたが、そういうカウンターパワーというものが出てこざるを得ない。けれども、権力との緊張関係は常にメディア、要するに、情報伝達をする側・される側の双方にあるわけで、その問題をどのような形で考えていくのかというのは残っているだろうと思うんです。

36年も前の本ですが、フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタールが『ポスト・モダンの条件』(1979年)を書きました。いわゆるポスト・モダニズムが全盛だったころもてはやされた本です。その中で彼は、今後は翻訳可能性のないものは捨てられる、情報の提供者と享受者は生産者と消費者の関係になる、知が権力の基盤になる、という3つの指摘をしている。これはネットが出てくる前の話で非常に目新しく、非常に的確な認識でした。

実はリオタールが展開していることであまり注目されていないものがある。それは、ドイツの社会学者ハーバーマスが主著の中で指摘した「コミュニケーションの基本はコンセンサスにある」という理念をリオタールが批判したことです。「コミュニケーションの本質はコンセンサスにはない。つまり一致にはない」。一致ではなくてある程度の一定の決まりどころがあって、それは常に変えられる。

われわれはある一定の決まりごと、意見の一致を見たという形でそれに拘束されている限り、新しい事態が起こったときに問題解決できない。問題は常に流動的なわけだから、コミュニケーションの目的はコンセンサスではない。意見の一致ではない。複数の選択肢があっていいんだ、その複数の選択肢が状況によって変わってもか

まわらないだと指摘したわけです。複数性というか、決して1つにまとまらない、ある意味では分散型ネットワークです。これはインターネットの基本理念でもあるわけですが、そういう理念をわれわれは忘れたくない。

インターネットは60年代のカウンター・カルチャーの申し子だと言われているのですが、そのカウンター・カルチャーが何から出てきたのか。ポイントは、ある種の政治運動だったわけで、ベトナム戦争も含めたさまざまな問題に対する1つの異議申し立てという形で現れてきた。

今は非常に困難な時代です。さまざまな対立葛藤が表面に現れてきてしまって、危険な時代に入りつつある。そういう状態であるから、異論を認めるというか、さまざまな意見の相違を認めるという前提をもう一度思い出すべきだろうと思うんです。

そういう意味で、現実像が生成される仕組みをつくるけれども、その背後の権力関係は、やはり、われわれは意識せざるを得ないだろう。それについて、チェンさんのお考えをお聞かせ願いたいと思います。

司会 ありがとうございます。続きまして、佐々木裕一よりコメントいたします。

佐々木 では、藤村さんのプレゼンテーションにコメントしていきます。

まず私がすごく気になったのは、「コンテンツとメディアが分離(アンバンドル)する時代が到来した」というフレーズです。中身だけがネットを介して届いて、それがさまざまなデバイスで表現され、提供されていくという意味ではわからなくもないのですが、私自身はこのフレーズには反対です。つまり中身であるコンテ



ンツやメッセージは乗り物であるメディアと不可分で、乗り物の形態によってコンテンツもわれわれも制約を受けているといつも考えています。

『Windows and Mirrors』（訳書は『メディアは透明になるべきか』）という本があるんですけども、ウインドウズとはメディアが透明になって、そのメディアを意識することなく窓から外を見るように中身を見るという考え方です。ミラーは逆に、メディア自体が反映的になっていて、どういう道具や器具、ないしメディアを使ってわれわれが中身に接しているかを意識させるという考え方です。私はそのミラーの立場をとるわけです。

スマートフォンに特化したアプリケーションである SmartNews では、アクセスすると必ずトップのタブを見せられるんですね。その横にスポーツとかエンタメというタブも並んでいるんですが、必ずトップタブが表示されます。トップタブと重要なニュースはセットで提供されている。つまり全員が見るべき話題を技術の力を借りて強制的に見せているわけですね。このメディアとコンテンツの組合せを意識している SmartNews ユーザーがどれだけいるかは別ですけど、トップタブというメディアに載っているニュースがそこにはある。フェイスブックで拡散される内容の 8, 9 割はスポーツ、エンタメの話題で、政治経済のハードニュースは少ないという研究成果があります。つまり強制的にトップタブで大事なニュースを見せないと、どうしてもソフトコンテンツばかりが見られるという現実があります。そこをスマートニュースは意識しているのでしょうか。

荻野さんのお話の中に、ビジュアル・リテラ

シーという言葉が出てきました。誰もが写真を撮る時代の写真を介したコミュニケーション方法を教育しないといけないということだったと思います。われわれは学部として 20 年間、メディアリテラシー教育を標榜してきました。提供されたメッセージやコンテンツを批判的に読み解く。発信する立場になったときに、どういうものが発信されるべきものなのかを考えて発信するということを考えさせてきました。けれども、メディアが複雑化、多様化しているので、今はメッセージと同時にどういうメディアで情報を受け取っているのか、どういうメディアを使って情報を発信しているのかというようにメディアについても意識的であるべきだと考えています。さきほどの比喻で言うと、ウインドウズじゃなくてミラーの立場を取って欲しいわけですね。メディアの形態に対して意識的であるべきだということは授業でも繰り返し伝えるようにしていますが、これからますます大事になることだと思っています。

2 点目はアルゴリズムの話です。これはどうしても避けて通れない話題ですね。SmartNews のトップタブでは、政治経済ニュースが半分ぐらい表示されます。その他にスポーツもエンターテインメント情報も表示されるのですが、どうやってそのニュースは選ばれているのだろうかという問題です。ニュース選定にあたり SmartNews のアルゴリズムはいろいろと工夫されているのはよくわかります。同じような内容のニュースを排除して、同じ内容がいくつもトップに並ばない工夫をされているという話もありました。でも選ばれている注目度の高いニュースの「注目度」とは何なのでしょう。それは「おもしろい」と表現されがちな内容とは

違うのでしょうか。

SmartNewsでは個人化(personalization)はあまり進んでいないと思いますが、仮に個人化されるとすれば、ユーザーが見てくれそうな内容をアルゴリズムは選ぶようになり、ユーザーがクリックしてくれた内容を繰り返し表示することになります。ソーシャルメディアではそれが実際に行なわれているわけですが、個人化が進むと、先ほどの話と同じで「おもしろい」話題が優位に立つ。つまりパブリック、われわれが市民として共有して考えるべき話題とは異なるものを、自分が見たいものだけをひたすら見るという状況に向かっていきます。注目度という指標の意味するものや、個人化の程度、ユーザーの行動ログデータをどれくらいアルゴリズムに反映しているのか、ということが気になりました。

3点目は、コンテキスト指向のメディア、あるいはニュースという最後に出た話題に対するコメントです。確かにマスメディアが提供する情報には、個人の状況に合わせたコンテキスト情報は含まれていません。今後、コンテキストがそこに注入されていけば、ニュースは会話に近くなっていくかもしれない。ただ会話に近くなっていくとすれば、やはりパブリックな話題、われわれが社会として話題にすべきものからどんどん離れていってしまうんじゃないかという危惧を持ちます。そこをスマートニュースはどういうふうに考えているのかが気になったことです。

司会 では、荻野 NAO 之さんに対して深山さんお願いします。

深山 私は文化人類学者でして、メディアにも写真に関してもまったくの素人で、専門的な

コメントはできないかもしれません。

文化人類学者はフィールドワークを基本的な研究手法にするというのは皆さんもよくご存じかと思います。その三種の神器の一つとしてカメラは常に位置づけられます。ところが人類学の歴史を紐解くと、人種とか民族とかに対する進化主義的な考え方が非常に強い時代に、カメラは異文化や異民族を一方向的、強制的な視点から測量する道具として存在する場面が多かりました。

日本で初めてのフィールドワーカーといわれる鳥居龍蔵が撮った沖縄や台湾の写真を見ても、そこに住んでいる人たちがおどおどしたというか、悲しげなまなざしで無理やり正面を向かされたり横を向かされたりして写っているものがたくさんあるわけです。そんな経緯がありますので、人類学において写真撮影は近年になっていろんな反省を促されてきました。つまり、一方的に相手を切り取るというある種の暴力、権力としてカメラというものが、少なくとも人類学の中にはある、あったという現実に対する反省です。

そうであるがゆえに、現在でも、私が研究しているニュージーランドのマオリの社会もそうですが、許可なく写真撮影すること自体に抵抗感をもつ民族があって、カメラと研究対象となる民族、さらにカメラと人類学者はいまだに強い緊張関係にあるといえます。もちろん私もカメラは持って調査に出るんですけども、写真撮影に関しては敏感になってもあります。現実には写真を撮ろうとして断られて非常に困難な思いを抱えることも多々あったわけです。

そういうわけで、人類学者としてはカメラに対して懐疑的なところもあったんですが、今回

## 「コミュニケーションの現在とこれから」

お話をうかがい、カメラの大きな可能性を改めて痛感した次第です。バーバル・コミュニケーションでは捉えきれないようなものをノンバーバル・コミュニケーションのツールであるカメラは切り取れるということなんだと思います。使いようによっては、荻野さんがインドネシアのシャーマンに近づいたときにそうであったように、言語よりもわれわれの皮膚に近い存在にカメラはなり得るのかもしれない。もしかしたら人類学はわりとその可能性を早くから切り捨てて、ちょっと怖がりすぎているのかもしれない。

いまインスタグラムでも日に何百枚の写真を撮ってアップする女子高生や女子大生……、まあ女子である必要も若い必要もないわけですが、そういう人たちは言語よりも柔らかく懐に入り得る可能性を持つカメラあるいはスマホの可能性を、映像を切り取る道具の可能性を人類学者よりも感覚的に感受しているのかもしれない。そのところを荻野さんはプロの写真家という点から改めてお話ししたのかなあと理解しました。

他にもたくさんおもしろいお話がありました。「遊ぶ」とか、「別天地」とか、目という言葉に近い言葉として「直す」「直し」のお話がありました。荻野さんは自分のお仕事を、「見ることを遊ぶ」仕事だと思われているのだと受け取りました。遊ぶという行為は、再び人類学に戻るならば、一般に「日常生活から離れて自由になること」、すなわち、ある種非日常的な行為だというふうに捉えられえます。非日常的とは、俗ないし世俗から離れるということですから、聖なる方向に近づくというのは当然の帰結ともいえるわけです。したがって、「遊ぶ」という言葉を「神として振る舞う」とことと白川さ

んが説明しているのは、人類学的な解釈と一致するわけです。

その一方で、「見る」ことを「直す」という言葉に近づけて解釈するならば、正しい状態が続くとか、平常のうちにあるとかといった意味になります。つまり、「見ることを遊ぶ」というのは、聖と俗の合間に戯れる、日常と非日常を行ったり来たりする、お仕事だという意味があるのかと思います。そう考えると、シャーマンとか舞妓さんとか、俗と聖の間を行き来する人たちを被写体に仕事をされているというのもよくわかる気がしました。

最後に質問なんですが、学部を意識して下だったのか、学生向けにビジュアル・リテラシーの共有という話をされました。カメラをはじめとするビジュアル・メディアはノンバーバル・コミュニケーションを生み出すわけですが、ノンバーバル・コミュニケーションは、言語がすくい上げられなかった溝をすくい上げる可能性を持つものです。となると、言語では不可能な、曖昧さとか無定形さとか自由をすくい上げられる可能性がある。そういうものとしてビジュアル・メディアの可能性を考えるならば、リテラシーとか共有との間で矛盾が生じてしまうのではないか。つまり、リテラシーがそもそも成立しない、あるいは形をある程度決めてそれを共有することがあり得ないからこそ、ノンバーバル・コミュニケーションの可能性があるんじゃないかなと思います。するとビジュアル・リテラシー、あるいはその共有、あるいはその教育なるものがたして可能なのか、意味があるんだろうか。ちょっと感じた疑問です。

司会 では、今の3名のコメントに対して、お一人ずつリプライをお願いできればと思いま

す。

まずドミニク・チェンさんから。桜井先生がおっしゃった30年経っても人と人との問題そのものは変わってないんじゃないか、また情報の流通に関して権力との関係をどう考えるのか、メッセージの一致ではなくて複数性というものをどう捉えるのかといったことに対してお願いいたします。

チェン 30年間で問題の本質は変わってないんじゃないかというご指摘ですが、80年代はぼくはまだ赤ん坊だったので正確には理解してなくて、後追いで勉強するみたいなことをしているの、正確にはわからないのです。

さきほどスピーチの中でふれましたが、量的変化によって質的变化が惹き起こされているというほうが、実際の感覚には近い。例えば過去の情報を継承して、新しい情報を生成するという仕組みを最も意識的に実践しているコミュニケーション・システムはおそらくアカデミアだと思います。論文を書く中で引用して、さらに引用されていくという、そのネットワークの中の関係性で価値が決まっていく。そのリンク構造にヒントを得てインターネットの秩序をつくったのがグーグルの検索エンジンなわけです。現実世界のあらゆるデータから上がってきて関係づけられていく、その構造自体は確かに変わっていないかもしれない。同じようなことはいろんな側面で言えると思うんですけど、インターネット以前とインターネット以後を不必要に断絶させる必要はないと私も思います。逆にインターネットによって、インターネット以前からあるんだけど、十分できなかったことをやっていくという意識は私自身もあります。

現実像を生成するメディアの仕組みや権力性

をどう考えるかについてなんですけど、コミュニケーションには、そもそも根源的な暴力性があると思うんですよね。今こうやってマイクを渡されてお話ししていますけれども、これは暗に私が言っていることを了解してくださいと言っているわけです。つまり、相手への指示が必ず含まれている。サイバネティクスを考えたノーバート・ウィーナーが『サイバネティクス』という本を書いた4年後に、『The Human Use of Human Beings』（人間の人的利用）という本を出しました。それはサイバネティクスという考え方の一般書として書かれたんですね。その冒頭で、コントロールとコミュニケーションは不可分だと言っています。機械は人間がオーダーをくだして、コントロールをして動かすわけなんだけれども、そもそも人間同士の話にもコントロールは含まれている。つまり機械と人間をコントロールとコミュニケーションという2つの概念の相補性において考えなきゃいけないということを言っているわけです。

これは、われわれの日常会話の中にもあって、じゃ、それについてどうすればいいのかということだと思うんです。よく引き合いに出されるカントの倫理に関する定言命法に、相手を自分の手段としてだけではなく同時にそれ自体を独立した目的として見なすというのがあります。つまり、自分は相手を利用したいんだけど、相手もこっちを利用したいよねという、一種の心の理論の構造です。自分も独立しているし、相手も独立している。そのことを踏まえた上で、対称性というものを考えるべきだと思うんです。

それで思い出すのが、イーライ・パリサーという、フィルターバブルの問題を取り扱った人のことです。彼はブッシュの落選を目指す運動、

ムーブオン・ドット・オルグ (MoveOn. org) を立ち上げて、その後、チェンジ・ドット・オルグ (Change. org)、その後にアップワージー (Upworthy) というバイラルメディアをやっています。これが非常におもしろくて、つまり、エンタメニュース的な、スポーツ、エンタメばかりが流れる中に、なかなか鋭いカテゴリーがたくさん並んでいて、もっと社会に対して意識的になれる「アウェアネス」タグとか、今まではハイコンテキスト過ぎて一部の人しか読まなかったようなものを、バイラルメディアという形でさくっとナゲット的に享受できるような形にして大量に増やす。そういうやり方もありますし、賛否両論あると思いますが、手法としては革新的でおもしろいと思います。

メディアを生成する仕組みに宿る権力性に立ち戻ると、そういうことは必ずあるんですが、今はそういうメディアを誰でもつくれる時代になっている。これはインターネットが生まれたときから言われていることですが、技術的条件がどんどん変わってきていて、制作コストが低下している。プログラミング技術もノウハウもどんどん共有されていますし、かかる金銭コスト、時間コストもどんどん低下している。そうした中で、フェイスブックやツイッターという巨大プラットフォームがありはするけれども、そのオルタナティブを考えられる状況であるという認識が大事だと思います。というのも、ぼくも学生たちと話していて、もはや IT 技術は所与のもので天から下りてきているものだというような印象を受けるんですよね。「LINE ってこういう仕様だから仕方ないじゃん」みたいな。でも、それだったら自分たちで別のものをつくるというパスもあるんだよという、その想

像力を育むことがとても重要なと思います。

今のメディア状況で、これは多分全体的な状況に対する印象なんですけど、すごく客観的情報にあふれているなあと。どういうことかという、「こういうデータがあるからこうなってます」というようなものです。つまり、エビデンス・ドリブンなデータジャーナリズムや、証拠が世界中から、いろんな人から分散して上がってくるという正の側面もある。他方で例えばツイッター上のコミュニケーションを見ると、議論が成立していない。つまり、叩き合うみたいなことですよね。コミュニケーションが進化しているのかというと、建設的議論というものをインターネットが育んでいるかという、まったくそんな気がしない。ここが非常に残念なところで、意見を変えることを恐れているという、なにか恐れさせるようなアフォーダンスでネットはあふれているんですよね。フェイスブック上でもポリティカリー・コレクトなことしか話さないし、ツイッターであえて炎上するようなことを書いて焚きつけるみたいな、人類に対する希望が持てないような風景が多い。

その中で、ぼくが自分でアプリをつくって思うのは、さきほどお見せした Picsee というビジュアル・コミュニケーション、あれは無目的なコミュニケーションなんです。用事がなくても、例えばこのコップの造形が美しいと思ったら、これをぼくの奥さんとか親とかにパッと送る。それは目的がないんですね。さきほどインスタの話がありましたが、個人では一日百枚とか撮らないんですね。数枚で、みんなのタイムラインだから汚さない。Picsee とか、LINE とか、そういうプライベートな空間だと、1日10枚、20枚。それで、何が起ころうかとい



うと、スマホを一日持っていて、目に飛び込んでくるプライベートな事柄に関する情報量がすごく増えるんですね。たわいのない写真が友達とか家族からきて、一種のデジタル・デトックスじゃないですけども、ずっとツイッターやフェイスブックを見てなくていいんだ、というような。

つまり、客観的なことが多過ぎるというのは、言い方を変えると、パブリックな場所というのが、インターネットで大き過ぎることなのかもしれない。だから LINE はそういう部分を穴埋めしてきているのかもしれないし、そのプライベート性が2010年代後半に希求されているのはそういうことなのかなあとも思う。

ちょっとだけお二人の話につなげると、荻野さんのお話の中に、「わかるって何なんだろう」という話がありました。バイリンガルのことはまさにぼくのことで、日本語で言えないことをフランス語で言って、フランス語で言えないことを日本語で言う。これには非常な弊害があって、両方の言語が中途半端になっていくんです。バイリンガル病みたいなものです。それをやっていると、言語の得手・不得手みたいなことがわかってくる。それはすごいおもしろくて、ずっと日本で生活していても、なぜか車を運転し始めるとフランス語になって、目の前の車をいきなりフランス語で罵倒し始めるとかですね(笑)。フランス語は運転中の罵倒に向いているんだということに気がつくわけです。

「わかる」とか、藤村さんがおっしゃったすばらしい情報、価値のある情報とは一体何なんだろうと思うわけです。価値の客観的な評価はできるけど、パーソナライゼーションの部分とか主観から立ち上がるすばらしさを、ロボット

というか機械技術が今後追いつけられたらおもしろいなあと思いました。

司会 ありがとうございます。

佐々木さんのコメントに対する応答を、藤村さん、お願いいたします。

藤村 応答ですね。さきほど応酬という言葉も出ましたが(笑)、好戦的な世代なものですから。

私があえて二元論といいますか、今どき流行らないアプローチでご説明したのは、メディアのビジネスに携わっている人間に対してよくわかってもらいたいところがあったからです。ここでも申し上げたんですけれども、形式によって担保されているビジネスであったり産業であったり、日本のメディア、あるいはマスメディアと呼ばれるものは大体20世紀、百年ぐらいかけて産業構造を垂直型につくり上げてきたわけですね。ところが、ご案内のように、今はスマホを1つ持っていれば動画も音声もテキストも渾然一体となって、アクセス可能な情報への回路をみんな1つの窓口を持ってしまった。その窓口に向かって殺到せざるを得ない環境なので、そこでどんな現象が起きているかを理解するのに、あえて二元論的なものを持ち出しました。

佐々木先生がおっしゃったように、時間をかけていく中で、また垂直化が起きる。つまり、スマホに最適化された、言葉で言うと形式と実体、コンテンツとメディアという形式で言うと、スマホというメディアに沿った表現形式を、またつくり出そうとするんだろうと思います。ですから、いい悪いという話は別にして、そういう力学的現象が顕著な状態になってきて、今後は変化がどんどん進むと思うんです。2020年ぐらいには「ほんとに皆さんスマホを使ってる

んですか」と言うぐらいの変化の時代だと思っています。ですから、よりリアルなコンテンツそのもの、論理的に言うと、メディアを分離した形でコンテンツを構想したり実装したりすることはあり得ないんですけど、メディアがどんどん変化することを前提にしたコンテンツづくり、あるいはコンテンツを追い求める仕組みに目を向けないと。少なくともここにいらっしゃるような方々には、問題意識として持たれてもいいのかなと思いました。

いくつかご指摘いただいて、ある意味でまったくそのとおりだと思っています。パブリックという視点が抜け落ちがちなんじゃないかというのは、ほんとにそのとおりだと思っています。ただ、ぼくらは大文字のワーディングを追いかけてきた世代なので、パブリックとかが今また言い始めると、それにまた拝跪（はいき）しやすいわけです。目の前のことばかり考えていないで、世界のことを考えろとか、人類の将来のことを考えろと言うと、そっちのほう偉いことのようにも響いてくる。あえて言う、われわれが直面している小さな、半径5メートルの野望の中で生起する政治や社会や生活の課題に最も近いところのポイントを運べるといいなあというふうに思います。

なので、やはり、自分に最適化されて自家中毒的に自分大好き、大好きなものをどんどん届ける、また大好きなものから離れられないみたいなのは、おっしゃるとおり不幸かもしれない。これだけ情報が多様化、多彩になった中で、あえてまた小さな穴を掘らなければいけないリスクにわれわれ直面しているのは間違いないんですけども、大文字の言葉で世界を語りたくないというか、もう一度60年代を繰り返したく

ないと思っているので、そういうふうにこだわっていきたいと思いますね。

アルゴリズムの問題は、そのとおりだと思っています。それを打ち破っていく多様性とかダイバーシティを生み出す方向は、哲学的にはあっても、それをいかにうまく実装するかという、そういうところに差ししかかっている。

ぼくはよく思い出んですけど、戦後すぐにレヴィ＝ストロースが「神話と意味」という講演をラジオでされて、ちょうど今みたいな時代のことを語っていた。「いま世界はオーバー・コミュニケーション—今の言葉でいえばグローバルイズムみたいなものですね—をスタンダードにしつつある」。つまり、何でも知って、何でもわかって、何でも通じ合うということを一所懸命信じようとしているというわけです。レヴィ＝ストロースがそのとき言ったのは、人類や生活、経済、習慣は非常に多様性に富んでいてアンダー・コミュニケーションが前提である。つまり、コミュニケーションが届かないよということから始めないと、人を理解したり自分を尊敬したりすることはできない。ちょうど50年前、60年前、あるいはもうちょっと前になるのかもしれないですけど、彼が語った哲学は今改めて必要になっている。ぼくらの指針としても重要なというふうに今思い返しております。

司会　ありがとうございます。では、荻野さんお願いいたします。

荻野　はい。写真家は写真で仕事をしているのですが、自分のこととなるとよくわからないんですね。なので、さっきみたいにコメントをいただくと非常にありがたく、ああ、そうかもしれないという、大変重要なきっかけをいただ

ける。これはほんとの正直な話です。

人類学の中での写真。はくも文化人類学に大変興味があるんですけど、そこに入り込むことを踏みとどまって写真家で活動しているわけです。

私にとって写真は何なのか。私もずっとわからなかったんですね。わからなかったので、会社員を6年半ぐらやって、その間に考えたんですけど、いま自分としてはギャラリーなどで写真を作品としてオリジナルプリントとして、それを売っていくことをベースにしていこうと考えています。便宜上アーティストということもあるんですが、厳密には私の場合、写真家は完全に＝アーティストでもなくて、やっぱり写真家なんです。そんな立場で撮る写真は、当然学問ではないし、実証性に依拠する必要があるわけでもなくて、ポエジーを含んでいいわけなんです。むしろそれがあった方がいい。

さきほど、カメラの可能性をとおっしゃっていただいたのですが、私はそんなに大それたことはしてなくて、その被写体の前になり、その空間に私はいたい。その人たちと時間を共有したいんですね。例えばカメラなしで私が花街の女将さんに「すみません。わたし舞妓さんの着付けに興味があって見たいんですけど、入れてください。化粧してるとこも見たいんですけど、入れてください」と言って、その後ろで正座して見ていたら、ただの変態ですよ。ところが「写真家なんです。メキシコではゲイシャっていうと、非常に間違っって考えられている。わたしはメキシコに住んでいたの、写真を通して伝えたいし、それを表現としてやりたいんです」と言って許可をいただいて入れてもらって、でも撮らない日もあるんです。きょう

は調子が乗らないなと思うと、芸妓さんが着付けしているところをただ横でボォッと見ていて、帰ってくることもあるんですけども、カメラはそれをやらせてくれる。では、これが文化人類学的かといわれるとわからないですね。

自分の写真はインタビューだと言っています。インタビューというのは、もともと語源学、モルホロジー的にはinter-viewなんでしょうけど、私はそこからさらにもう一歩踏み込んで捉えています。

例えば私と学部長さんがいるとします。この間に私は幕を張るんです。私は、この幕を通して学部長さんを見る。学部長さんは同じ幕を見ているけど、反対側を見ている。向こう側に何が映っているか実は私はわからないんです。私はこっち側を見ている。ただこの幕は、この2人の間だけに発生した幕で、相手がいないと、この幕には何も映らないし、相手が替わると幕も替わります。私は、その幕を見に行きたい。それが学問かどうかわからないんですけど、アートだといえば楽なんですね。「これ私の幕です。私はこれを見ました。どうぞ」ということです。実証する必要はない。はたして私がやっていることが何になるのかわからないんですけども、私としてはそういうことです。

2つ目にいただいた聖と俗の間。これは、なかなか「はい」とは、烏滸がましくていいにくいんですけど、多分そうです。ただ聖と言ったときに、宗教的とか、そんな大それたことじゃないんです。私にとって聖とは、新しく生きるということです。別天地。いまの瞬間までなかったものを、自分が一歩前に出て、例えば「うーん、合気道やりたいな」と思って合気道を習い始めたら、それが別天地なんです。新しいこ

とを生きてるだけで、別にになにかすごい大それた宗教みたいなことではなくて、その変化の間(あいだ)、合気道をやってない人間が合気道をやると、何がどう変わるんだろうという、その変化を見たい。

それが、私が花街の裏側を見に行く理由なんです。きょう、会場の入口に写真集を置いてもらっていますが、私は表の宴会には全然興味ない。あれは結果論なので、舞妓さんが育つのは舞妓さんの裏舞台で、裏で女将さんに叱られながら、常日頃着付けてもらいながら着物の所作を学びながら身に付けていっている何かが、例えばボォーッとしている最中にふと、「あー、萩野君、もう疲れたよ。今からまた行かなきゃいけないよ」といった会話を炬燵でしながら、その瞬間瞬間にいろんなものが、色々な変化の兆しが見えてくる。私はそこに興味があるので、おっしゃっている聖と俗の間というのは多分そのままだと思います。

3番目のリテラシー。これは、非言語リテラシーがあり得るかということです。学問の側からすると、そういう問いが現れてくるのは当たり前だと思います。なぜか。学問は言語だから。ところが、リテラシーは学問じゃないんです。花街にはすごい花街リテラシーがあります。どこにもルールブックはないんですよ。舞妓さんが初めて入るときに、かわいそうだなと思いますけど、どこにもルールブックもないですね。15歳の女の子がいきなりポーンと置屋さんに来て見習いを始める。そこから何が始まるか。ひたすら叱られまくる人生が始まる。だって、どこにもルールブックはないし聞いたこともないんだから、間違うのは当たり前じゃんということなんですけど、ひたすら何か間違

ったことをしたときに叱られることで鍛えられていくんです。叱られなかったらセーフなんです。言語で叱るかもしれないけど、言語で規定されていないんです。ルールブックはどこにもないんです。だけど、それがだんだん襟替えをして芸妓さんになっていくと、いつの間にか自分が叩き込まれてきたことを舞妓さんに言うんです。あれは完璧にリテラシーが存在しているんだと思います。

花街の共育システムはすごいと言うと、時代錯誤だと言われるかもしれません。それは非常にむずかしいんですけど、おそらく日本はそういうリテラシー共育をずっとやってきた。江戸時代はほぼそれがすべてだったんじゃないかと思うんですね。職人さんに背中を見て育てと言うわけです。こう削れということはどこにも書いてない。10年、丁稚奉公していたら身につく。これはおそらくリテラシーでもあり技術でもある。それをどうやってビジュアルでやるのか、しかも学問にやれと投げかけたのは確かに私なんですけど、学問がそれをできるのかわかりません。だから投げかけたんです。

お二人のお話と関連するのですが、例えばPicseeというソフト。あれが1つのリテラシー共育のツールになる可能性もあるんです。ということか。

子供と両親の3人だけで共有するスペースがあるとします。親にリテラシーがあれば子に伝わる。親が自分のリテラシーをちゃんと認識して、それにのっとって写真だけをばんばん、そこに上げていって子がそれを見ていけば、それは古美術の丁稚みたいなもので、いいものばかりずっと見せていけば、古美術商が育つように、親がそのリテラシーを持っていれば伝わるんで

す。多分いまの課題は、親もそのビジュアルリテラシーを持ってないことですね。ないものをどうするかというのが課題で、できちゃえば、伝達の方法はPicseeで十分できるかもしれない。「子供はこれを見なさい」と言って、親がどんどん、リテラシーとして画像を見せていく。「これは駄目だよ」というのはモノクロにして見せていくとか、そういうふうにしていったら、リテラシー共有は十分できる可能性はあると思うんですね。問題は、それを私も含め大人たちがまだちゃんと持つに至っていないことです。そこは、私もわからないので、学問の力を借りてみたいと思うわけです。

藤村さんのお話で、メディアとコンテンツの関係ができました。これは写真で言うと、すごくわかりやすいんです。文字はむずかしいと思います、文字は本来デジタルデータだから。

私もデジタルカメラを使います。そのデジタル写真をしっかりしたプリンターで、例えばハーネムーレの紙を使って、自分でプリンターのセッティングをしっかりと、何日も何日もかけて形を決めて、「これだ!」というところで出力して、エディションを1/7とか付けてギャラリーへ持っていったら、それなりの値段で売れるのです。ところが日本の出版社は予算がないですから、そこらへんの出版社にその写真を、まるっきり同じ写真データを送って掲載すると大した金額にならない。誰かがそれを切り取って額装するかもしれない。同じ写真なのに、違っちゃうんです。私は今そのデジタル写真データを使ってデジタル・ネガといってプラスチックのシートに出して、それを暗室で1850年代ごろのソルトプリントというプリント技法でプリントしています。自分で硝酸銀を塗布して

和紙にプリントするんですが、そうして良いオリジナルプリントができると高く買ってもらえる。まあエディションの数にもよりますけれども。

今度はこの写真を、みんなに知ってほしいからと思ってフェイスブックに載せるとします。するとみんなフリーで写真をシェアします。データの画素数は違いますが、フリーであちこちに行っちゃうんです。

だから写真においてメディアの選択は決定的にコンテンツの価値を変えちゃうところがあるんです。テキストではないですが、新聞の写真などをハイクオリティのプリントにしたからギャラリーで売れるかという、これはほとんど売れないかもしれません。そこは写真の中でもいろいろなわけです。例えば世界に大きな影響を与えたマグナム・フォトの写真家の写真のプリントがどれぐらいで売れるのか。(アンドレア・) グルスキーは数千万だけど、マグナムの写真家はせいぜい数十万かもしれないとか。これは人間の認知の問題もあるし、写真そのものではなくて、「あー、これはもうジャーナリズムだから、アートとしての価値は少ないよね」とか、そういうカテゴライズされてしまうところの問題もはらむんです。けれども、テキストに関しては、私もちょっと考えてみたいと思った話題です。

司会 一通りコメントと応答をいただきました。ここで、フロアからのコメントをご紹介します。応答いただきたいと思います。

ドミニク・チェンさんのご講演に対してです。メディアとコンテンツの分離の問題、またリテラシーの伝授にもかかわってきますので、できれば、登壇者の皆さんにお答えいただきたいと



思います。質問を読み上げます。

「インターネットが脳をつなぐメディアであるとして、プロフェッショナルとアマチュアの境界は今後どうなっていくのでしょうか。特に表現の世界でどうなっていくのか気になります。東京オリンピックのエンブレム騒動は時代の変り目の象徴的な出来事に思えました」。

表現に関してプロとアマの違い。そのあたり、皆さんいかがでしょうか。

チェン さきほどの荻野さんの話を聞きながら考えていたこととも合致するので、それをお話します。例えばインスタグラムというものがあります。ぼくは、ありとあらゆるおもしろいものに対して没入しながらも、同時に十歩下がってクールに見るという、引き裂かれた精神の持ち主じゃないですけども、インスタグラムを中学生や、高校生がばんばん使っているようすを見ると、ほんとに文化人類学におもしろいんですね。

写真家の友達が、どうして自分はインスタグラムを使わないのかにふれて、こう言っています。その人は商業的な写真を撮っているのですが、インスタグラムは写真家ごっこができるツールに見えると言います。実際そうした側面があって、ピンボケした写真とかいわゆるアマチュアの写真はパブリックにさらせるものではないんですね。それを適切なフィルターを選ぶだけとそれっぽく見えるようになる。それによって世界じゅうのインスタグラムのアクティブユーザー数億人に向けて写真をさらせる。これだったら見せられるという。彼はそれを「お化粧できる」と言って、お化粧してインスタグラムにアップする。だから本当のプロフェッショナルリズムの観点から見たら、それはもしかしたらつま

らない一歩なのかもしれないけれども、人びとが恐れずに写真を投稿できるようになって、その中からすごいクオリティのものが出てくるわけです。プロの写真家も真っ青みたいな質と量のものがどんどん出てくる。

その両方の視点で見ないと正確に捉えられないかなと思っています。

もう1つ、さきほど桜井さんからいただいた指摘とも重なるんですけど、プロとアマの境界は、1万時間費やせたかどうかみたいな話です。一人前になるにはまず1万時間使えとよく言われます。プログラミングも1万時間超えたらようやく一人前だねと。舞妓さんの修業にもつながるかもしれません。しかし、これを根性論だ、精神論だ、やれ体罰擁護だとか、そういうことに回収したら非常につまらない。ぼくは逆に、日本の弊害と呼ばれているものの中におもしろみを探さないと、西洋的論理にすべて覆い尽くされてしまうと思っているんです。結局、偏執的な執着心を持った人間が一番レベルの高いところに行けるにすぎないと思っているので、それを下支えする制度として、修士号や博士号、資格があるにすぎない。

ぼくは、博士号を取るのに休学期間も含めて7年かかったんですけど、先生たちに、博士号は運転免許証だからと言われて、あ、そうか、なるほどと思って、ずいぶん気が楽になりました。つまり、それを得てスターティングポイントに立ったり、本質的に興味のある活動により時間が割ける、コストが割けるということにすぎない。だから、アマとプロという二元論自体、撤廃して考えたほうがみんなのためにもいい。アマよりおもしろくないプロはたくさんいます。

オリンピックのエンブレム問題も、そういう

意味では、非常に画期的なことだと思うんです。つまり、国家プロジェクトに関する有識者たちの価値判断が、ネット民、主にツイッター民によってやすやすと覆されてしまった。それはいろんな複雑な切り口があるので、ここでは詳しくは話しませんけれども、その事態を受けて、それでは次の文化的な評価軸をどうつくっていくのだろうかという問題は非常におもしろい領域だと思っています。例えば藤村さんのやられているニュースという領域でも、PV 主義、見られた回数、リツイートされた回数だけでなく、実際にどれぐらいの文字量がその記事の中で読まれたのだろうかを推測する技術も開発が進んでいるので、絶望していません。より人間の自然、あるいは本来の性質に近いものに技術を寄せていくことが、ぼくは非常におもしろいし、可能だと思っています。

藤村 写真が出てきたところで。

荻野 先ですか(笑)。

プロとアマという区切りは日本だけなのかなあ……。プロというときは、「それで金を稼いでる」という表現がよく使われると思うんです。メキシコは不思議な国で「あなた、プロなの？ アマなの？」というのは関係なくて、そこらへんのおばちゃんが「わたし、これ作ったんだけど」って、写真展をやっていると持ってくるんですね。「どう思う？ いい?」。そのとき本人は、アマとかプロとか関係ない。「作った。気に入る? 気に入ってくれるんだったらプレゼントしようか。でもちょっとお金がかかったし、これだけお金ちょうだい」。そこからビジネスが始まるんです。

プロ、アマという区分は、最後はともかく、入り口では確かにもう関係ないのかもしれない。

後で結果論として、あの人あれで食ってたねということでしょう。この間、こうこうこういう人が亡くなりました、あの人は写真で生計立ててました。でも、ほかのこともやってました、みたいな。どれを評価するかということはあると思います。

質問の本質は、言葉のことではないんだろうと思うんですね。アマチュア的なもの、プロ的なものの境目があるのかどうか。さきほども鉛筆と写真の違いを言いましたけれども、人類の歴史でみたら1億人が文字を書く時代は最近のことです。昔はみんな文字を書けなかった。希少価値だった文字を書ける人たちからしてみたら、「うおー、勘弁してくれよ」とか、「全員が文字書くようになると、みんな何か書きちゃうじゃないか」、そのとき有利だった人たちはそう言うでしょうね。少数のお坊さんのように自分たちしか文字が書けない人、もしくは都の中にいた人。だけど、そういうことはなくなってみんな書くようになった。特に日本はけっこう早くから。みんなが書いたから、その中で質は平坦になったのかというと、そんなことないですね。やっぱり三島由紀夫の小説はいいなということになる。まあ、そこには従来の出版社などのシステムの問題もありましたけれども。

特にブロガーについて考えると、中身の善し悪しをアクセス数で評価すべきかどうかはわかりませんね。昔はそれを出版社の編集者が決めたんですね。「講談社のラインに入れたら、もうラッキーだね、君は」という。そこには運不運みたいなこともあったと思うんです。ブログ掲載などハードルが低くなったところで、これからは読者一人一人のリテラシーにおいて、その人にとっての、つまりマスとしての評価で

はない部分で、その人にとってそれが良いのか悪いのかということになるんだと思うんです。

これをマスの発想で考えると、「じゃあ、マスは？、みんなどうなの？」という話になっちゃうけど、そのマスとしての「みんな」というときのリテラシーの共有が今後できるかは、ほくもちょっとわからない。ほくは電通という会社にいましたけど、辞めるときに自分で決めたことは、「マスを辞めるんだから、ニッチにいこう」。ということでした。マスを相手にするのはやめたんですね。

さきほどプリントの話をしたとき、例えばエディション1/7と言いました。7人が偏執的に私の写真を好きだと言ってくれたら、それで全部売れるんです。7人のパトロンが私のギャラリーにくっついて私の写真展でプリントを全部買ってくれたら、多分それでずっと生きていけるんです。たった7人。今は変わっているかもしれないですけど、一時期ニューヨークのギャラリーが、マンハッタンでギャラリーをずっと続けるために必要だと言われたのは7、8人のパトロンだと聞いたことがあります。それだけいればそのギャラリーは、誰も来なくてもやっていける。家賃を払って作家にお金払って商売をやっている。マスの評価とマスの人数は必要ないんです。ほくは、ニッチにいこうと思ったんです。だからと言って、もうマスは知らんよと言うわけにはいかないんですけれども。

ただ、今のネット社会で、マスの価値が本当にあなたの価値なんですか？ということがあります。自分の価値で良いんだったら良いじゃないか。そのときにその人が、この人はプロ的な写真だと思ってそれを信じて、「でもお金は出さないよ」といえが、結局その程度にしか信

じてない、もしくはその程度にしか必要ないということなんです。「あー、タダの価値の中でプロを探しているのね」ということになりますし、「いや、これは私の給料1ヵ月分投じたっていい。人生の中でこの写真と一緒に暮らせるんだったら、10万20万払う」となれば、それだけその人がその人のリテラシーでそれを選んだというだけのことなんです。そのときに、その写真家なり、そのイメージをつくった人は、その人にとってヒーローかもしれないし、プロであるかもしれない。ほかの人は誰も買わなかったかもしれない。だけど、その人にとっては、その1枚がすべてなんです。

それは簡単なことです。例えば誰かの父親が亡くなったとします。遺品の整理をしていると、中から1枚の写真が出てきた。「え？　うちの父親って大学のときに写真やってたの？」。何の変哲もない写真だけど、その1枚の銀鉛プリントが出てきたら、その1枚はその子供にとって最高の写真なんですね。絶対捨てられない。そこに遺産相続がからんで、「あんたのお父さん借金あったから、金になりそうなものは全部持っていく」と言われたときに、「あ、これなかなかいい写真じゃない。100万円の価値あるね」と言われたら、その人は友達に100万円借りてでも、その写真を買戻すかもしれない。他人にとってはどうでもいい写真で、そこらへんに捨てられる写真かもしれないんです。だけど息子にとっては、その写真1枚に100万払うだけの価値がある。

そういう多様性ということをビジュアル・リテラシーなりメディアリテラシーということも含めて今の時代は考えていったほうが良いんじゃないかなと、私は思っています。

藤村 ぼくは、プロとアマの境界はいつも括弧に入れて、そこは柔軟でいいんじゃないかなと思っています。プロの人はアマチュアが攻めてくるというので、ちょっといやな思いをされるケースがあるのかもしれないけど、それだけチャレンジがたびたび繰り返し起き得ることは多くの価値を享受する人びとにとってはいい環境なんじゃないかなと思っています。その中から才能が現れる可能性も大いにあると思っています。

こういうことは昔からあるわけです。俳句にしても短歌にしても、短詩型は特に日本では結社みたいなものがあって、その結社の中で序列をつけられて、そこから抜けられない。なので、結社を要らないと言う人たちが出てくると、“異端”と言われるわけです。しかし、今そういうことを厭う人はいないと思っています。本当にチャレンジしやすい環境になってきているので、今の環境を数十年前に比べて悪くなったというふうには到底思え得ないのです。むしろ、この環境を生き抜かなければいけないなとさえ思っています。

自分にはクリエイティブな才能がないので、自分たちのやっていることが多くのクリエイターの活躍の場になるのであれば、けっこううれしいというか、ぞくぞくするというふうに思っています。なので、今はすごく幸せだと思っています。

チェン スマートニュースで最近やられている「アトラス」(SmartNews ATLAS)ですよね。

藤村 はい。

チェン ぼくは個人的に素晴らしい取り組みだなと思っていて、きょうの話にもつながるも

ので、ご本人を前にご紹介するのはあれなんですけど。

「アトラス」は日本全国のNPOにスマートニュースの中で露出の機会を与えるというプログラムです。いいなと思うのは、ただ枠を与えるだけではなくて、一緒にハンズ・オンで対話して、どういうふうに活動を紹介すればいいのかということまで、非常に根気よく(スマートニュースの)望月さんがリードされています。さきほど、情報の摂取が多過ぎて表現が足りないということをお話ししたんですけれども、より公正な情報の出し方を、トップダウンの機関ではなくて、技術を作る現場でコンテンツを作っている人たちが共同してやっていくということを前線でやられているのは、一ユーザーとしても一起業家としても本当に勇気づけられるなと思っています。

藤村 ありがとうございます。

司会 時間が迫ってまいりました。コメントーターのみなさんから一言ございますか。

桜井 では1つだけ。情報の量的変化が質的变化を生むかどうかという問題です。

個人的に言うと、情報があふれ返ればあふれ返るほど、結局、その情報の洪水に埋もれてしまって何が何だか訳がわからなくなってしまうように思います。私も年を取ってきて、身の回りの始末をしなければならなくなり、必要のない本を捨て始めているんですが、何を捨てるかは非常にむずかしい。情報が増えれば増えるほど、要するに、不必要な情報のほうがたくさん増えてくるんです。本だってやたらある。何万冊とか、自分が買ってきた本ではあるわけだけど、それを処理しなければならない。情報も同じように、どんどん増えるばかりで、その選択

が非常にむずかしいわけですね。たくさんあった録画済みの VHS テープはほぼ全部捨てました。今度は録画済み DVD-R を捨て始めています。要するに、情報はたまっちゃうわけです。そのたまった情報をどこかで捨てなきゃならない。保存を断念しなきゃならない。質的变化というよりもそういう問題が究極的にあると思います。

佐々木 私がきょう印象に残ったことは、皆さんの話で何度か出てきたことばなのですが、「オルタナティブを見つける」ということです。さきほど藤村さんは「60 年代を繰り返したくない」「大文字の言葉で世界を語りたくない」とおっしゃいました。あまりパブリックの方向には振れたくないということだと思います。実際、パブリックとプライベートという二元論で言うと、ドミニクさんも言っていたように、プライベートなデータが大量に流れるようになっていくし、それを摂取する機会も増えています。「でもそれだけじゃあ、住んでいる世界が狭すぎるんじゃない？」という気持ちが私にはある。とはいえ「パブリックに目を向けろ」という言い方は確かにちょっと乱暴かなと思うようになりました。パブリックでもプライベートでもない、もう 1 つのオルタナティブな世界がある、もう 1 つの選択肢があるということを、とりわけ若い人には気づかせてあげたいなと思いました。メッセージアプリでひたすらやり合う世界とも、マスメディアが報じる世界とも違う世界がちょっと目を転じるとあって、それは君の考えていることをもうちょっと広げる場所にならないかということを、教員としては教えてあげべきじゃないかなあと感じた次第です。

深山 お三方のお話をうかがって非常に刺激

を受けたんですけれども、いずれにせよ、どんなものを好きであったり、どんなものに関心があったりしても肯定される。つまり、主観の絶対的肯定の方向に今のメディアの流れはあるのかなあと思いました。その中で、誰もがプロ、アマという境が薄らぐなかである種のコミュニティが作れる。

ただ、ここでやはり文化人類学者として一言申し上げたいのは、となると、グローバル・コミュニティを形成せよとまでは思いませんけれども、圧倒的な他者というか、圧倒的に違う人と出会うためのコミュニケーションの可能性をどのように考えておられるのかということです。おそらく皆さん考えていらっしゃると思うんですけれども、みな肯定される世の中というのは、自分とは圧倒的に違う人も肯定されるべき世の中であって、そのことをこれからのメディアはどう考えていくのかということが、コミュニケーション学、あるいはコミュニケーションの実業においても非常に大事な問題になるんじゃないかなと思います。

司会 ありがとうございます。司会の不手際で時間がおしてしまいました。ご紹介したいフロアからの質問もたくさんあったのですが、かなわず、申しわけありません。この会場の熱気と、わいてきた言葉、アイディア、論点は私たち一人ひとりが持ち帰り、展開させてゆければと思います。コミュニケーション学部の在学生たちが今日の議論をどう捉えたのか、その反応も楽しみです。コミュニケーション学部は、これからどうあるべきなのか。様々な方向から考える貴重な機会となりました。登壇者の皆さま、本日はどうもありがとうございました。



## 閉会挨拶

関沢英彦

きょうは講演者の方々，そして聴衆の皆様，お忙しい中をありがとうございました。最初に学部長から「関係と関係の分断」という話が出まして，あれ？ 話は，どこへ向かうのかなと思いましたが，その後，ずうっと，議論の基調低音となって展開されることとなりました。

藤村さんがハイコンテキストというお話をされて，つまり，わかる，わかるで通じちゃう仲ですよ。それを可能とするツールもどんどんできているわけです。ドミニク・チェンさんのお話しにあったように，フェイスブックに書くほどでもないマイナーな話題，クリームソーダの境目にこだわるみたいなことを伝えて，共感を共有するアプリもできている。でも，それがますます趣味嗜好の微差によって，関係を分断するかもしれない。一方，重い分断もあります。荻野さんは言葉こそが関係を分断するんだと，バシッとおっしゃいました。そして，相手の言葉をしゃべれないことで，かえって深いつながりが可能になることもあるんだというお話，すごくおもしろかったわけです。ただ，そうなりますと，ドミニク・チェンさんがおっしゃった2015年11月13日，パリのテロ事件の折，テロで奥さんを殺されたご主人が，あくまで言葉を捨てずに，「テロリストへの手紙」をフェイスブックに書きこみ，「憎しみという贈り物は送らないよ」というメッセージを送ったという話をどう考えるのかという問題にもなります。人と人の分断をつなぐのは，言葉なのか言葉でないものか，どっちなんだという話になってま

います。そこで思い起こしましたのが，言葉と言葉じゃないものがまだ分離されていない時代のことなんですね。

例えば千数百年前の『日本書紀』巻二に「萤火（ほたるび）の光（かがや）く神，蠅声（さばえ）なす邪しき神（あしきかみ）あり。草木咸（ことごとく）に能（よ）く言語有（ものいうことあ）り」といった主旨の一節があります。

螢の光のようにかがやく神さまもいれば，蠅がブンブンというようなあやしい神さまもいる，そして，草や木もみんなしゃべっているよ，ということでしょうか。そういう感受性をこの当時の人は持っていた。現代でいえば「萤火（ほたるび）の光（かがや）く」というのはスマホの画面がちらちらしていることかもしれないし，「蠅声（さばえ）なす邪しき神（あしきかみ）」というのはヘッドホンから漏れている音であり，「草木咸（ことごとく）に能（よ）く言語有（ものいうことあ）り」は，IoT（Internet of Things）であるということになるかもしれません（笑）。いずれにしても，このように言葉と言葉じゃないものが分離してない混沌の世界を感じ取れるおおらかさが，人と人の分断を融かしていくのかも知れません。

きょうの趣旨は，コミュニケーション学部20周年ということでありました。『日本書紀』の時代を思い浮かべるなら，過去20年，これから20年なんて，まあ，あっという間の瞬間であります。けれども，そうした中でわれわれに課せられた課題は，きょうお三方からいただいたお話をどう授業に活かすのかということでもあります。

1つは，文脈を共有しない人びと，藤村さんが引用されたエドワード・ホールの言葉でいえ

## 「コミュニケーションの現在とこれから」

ば、ローコンテクストの人びと、つまり、わかる、わかるでは通じない人、異文化の人とつながる言葉を発することができるのか、ということ。いいかえれば、狭いコミュニティを超えて、どこの人が読んでも通じる言葉を習得することが学生には求められております。

もう1つは、荻野さんがおっしゃられたように、そばにいるというだけでシャーマンが「いいよ」と言ってくれるようなつながりを作る力でしょう。あえて、そばにいる優しさと言わずに、そばにいる技術と言いたいんですが、学生

たちに、そばにいる技術、ただそばにいるということの、大切さとテクニックをどうやって教えればいいのかという課題があると思います。

きょうは予定の時間よりもだいぶ延びましたが、講演者の方々、聴衆の皆様は、文字通り、そばにいていただいたことで、われわれは多大なものをいただきました。これこそがコミュニケーションの基本であろうかと思ひます。

改めて、きょういらしていただいたお三人に拍手をいただきたいと思ひます。ありがとうございました（拍手）。



写真 登壇者と学部教員によるパネルディスカッション